

改訂出版によせて

一般社団法人 日本アーユルヴェーダ学会理事長 北西 剛

インドアーユルヴェーダ医学は中国を経て、日本にもその一部が伝わり、古代のギリシャ、中世のアラビアを経て西進し、西洋の医学にもとりこまれている。したがって、西洋の医学にも使用されている種々の薬物がインド起源であり、ススルタ・サムヒターに影響を受けているというのが定説である。

このたび改訂出版される『チャラカ本集 改訂版総論篇』は2ヵ国語(サンスクリット原文のローマ字表記、日本語)に対訳された労作である。この『チャラカ本集』はアーユルヴェーダの3大古典のうち最古のものであり、哲学的にも、倫理的にも優れた内容に溢れ、現代にも生き続けている貴重な世界の財産といってもよい。

さて、日本におけるアーユルヴェーダ医学の歴史を遡って今般改訂出版される『チャラカ本集 改訂版総論篇』が長い歴史と学会関係者の努力の賜物であることを思い出していただきたい。

日本においてはじめてインド医学が研究誌に登場するのが1921年(大正10年)泉芳環の「印度の医方及び薬物 -ヘルンの図書の解説として-」、続いて1923年(大正12年)同氏の「印度の古典に顕われたる医方及び薬物について」、根淵竹孫の「仏典より見たる古代印度の医学思想」があり、宇井伯寿によって「チャラカ本集に於ける論理説」の論文が印度学仏教学研究2巻に登場する。

昭和に入って、大地原誠玄が訳した「国訳古代印度医典チャラカ本集」と「シユスルタ医学」が発表され、1941年(昭和16年)にサンスクリット語からの大地原誠玄訳の『ススルタ本集』が出版された。

戦後になって印度医学が論文として登場するのが1961年(昭和36年)の善波周による「インド医学における科学と論理」になる。続いてインド伝統医学研究が始められたのは1967年(昭和42年)前本学会理事長である幡井勉(東邦大学医学部教授)、丸山昌郎(日本民族医学研究所)らによりインド伝承医学研究会が設立され、1968年(昭和43年)にインド伝承医学研究調査視察団が丸山博(大阪大学医学部教授)、幡井勉、石原明等の9名が訪印しアーユルヴェーダ大学や研究所を歴訪した。その一年後の1969年(昭和44年)丸山博教授の大阪大学にてアーユルヴェーダセミナーが初めて開講され、1970年(昭和45年)丸山博らの呼びかけでアーユルヴェーダ研究準備会が発足し、アーユルヴェーダ研究会が有志約50名により設立されたのに始まる(会長：丸山博)。

当時すでに日本の西欧医学偏重への反省をこめてアーユルヴェーダ医学が生命と健康の科学として、食を中心に、実用的な学問として理解されはじめていた。時を同じくして日

本医学史学会の『スルタ大医典』出版委員会が中心となり、千葉大学伊東弥恵治教授と鈴木正夫教授により完成した『スルタ大医典』I～III巻の刊行もアーユルヴェーダ医学の歴史に残る偉業であろう。

1975年(昭和50年)第1回日本アーユルヴェーダ研究会総会が大阪(会長：丸山博)において開催され、研究会設立の目的もインド伝統医学アーユルヴェーダとその関連分野を研究し、健康と医療の理想的なあり方、「いのち」の認識の深化とその普及につとめるということが掲げられた。

1987年(昭和62年)には日本アーユルヴェーダ研究会にヨーガ療法の研究者等も参画するようになり、学術発表の範囲も大きく変遷し始めた。1989年(平成元年)にはNHKテレビにて「中国・インド伝承医学」が詳細に放映され、国民の間に大きく浸透した。1998年(平成10年)第20回日本アーユルヴェーダ研究会総会(福井市 会長：山崎正)において、日本アーユルヴェーダ学会(The Society of Ayurveda in Japan)と名称を研究会から学会に改めた。

2008年(平成20年)記念すべき第30回日本アーユルヴェーダ学会総会が宝塚市において、本邦初のインド国家認定アーユルヴェーダ医師である稲村晃江(イナムラ・ヒロエ・シャルマ)会長により開催され、同時に会長の献身的な努力により日本アーユルヴェーダ研究会誌全37巻より優れた論文を抜粋した論文集(第30回学会総会記念号)が発刊された。この記念号は過去の日本におけるアーユルヴェーダ研究が収められた総ページ数464頁にも及ぶ集大成である。

このような歴史の中で、日本アーユルヴェーダ学会関係者らの大変な努力によって『チャラカ本集 総論篇』の訳出が約10年をかけてすすめられ、2003年から2008年にかけて「アーユルヴェーダ研究 別冊」として4回に分けて刊行された。そして2011年にこの4分冊にさらに精査を加え、索引を付し、単行本として初版が出版された後、今般、改訂出版のはこびとなったものである。

改訂版となる本書は、第一段にサンスクリット原文のローマ字を載せ、第二段には日本語訳を載せた大作である。多くの時間と会員の努力によって初めて成し得た労作であり、その完成に日本アーユルヴェーダ学会会員を代表して拍手をお贈りしたい。

目次内容を見てみると、薬剤に始まり、健康法、治療の基本事項、治療の準備、疾患の種類、栄養と治療方針、飲食物に区分され、それぞれが基本事項の四章群として分けられ詳しく丁寧に解説されている。結びとして2章があり、生氣(生命)が宿る領域と心臓につながる脈管群が述べられている。

私にとって、大変に興味を引くのは、健康法に関する第5章から7章の食に関する内容であり、準備に関する第13章と14章の油剤法と発汗法、汗は生体内に取り込まれた毒物を排泄するためにも大変な役割を担っていることが最近明らかにされ、特に皮脂腺からの汗が有害金属として知られている水銀、鉛、カドミウム、砒素などの排泄に役立っている。いろんな発汗法について述べられているが、どの方法が一番皮脂腺からの汗排泄に有効か検証できないものかと願っている。ここでは適切な浄化法をどのように選択するのが解説されている。さらに第16章の治療に優れた医者とはどのような医者を指すかなどは現在に

も通じることであり日頃の診療に活かしたい内容である。

本チャラカ本集では多くの植物が登場するがその表記法にはサンスクリット名のカタカナ表記なども併記されている。

多くの困難を乗り越えて『チャラカ本集 改訂版総論篇』は完成したのであり、今日アーユルヴェーダ医学を学ぶ私達にとっても、またこれからアーユルヴェーダ医学を学ぶ人にとっても、その本流に触れるために、本書が寄与するところ多大であることを信じている。

ここに、長年にわたり翻訳等の作業にご尽力いただいた学会関係者の氏名を次に記して、心からなる謝意を表しお礼申し上げたい。

翻訳協力者(敬称略、順不同)

稲村晃江(イナムラ・ヒロエ・シャルマ)、U.K.クリシュナ、中村知見、潮田妙子、仙田伊津美、高峰靖子、土江正司、牧野博子、渡辺京子、青山圭秀、上馬場和夫、松岡恭子、中川和也、長澤宏、木村慧心、佐藤真紀子、野坂見智代、竹内裕司、(故)H.S.シャルマ、(故)山内宥巖、(故)難波恒雄

2024年6月

(きたにし耳鼻咽喉科院長 北西 剛)

インド医学
チャラカ本集 改訂版総論篇
*
目次

भेषजचतुष्कः

I 薬剤に関する四章群

第1章 「長寿を…」の章

アーユルヴェーダの成立003

- [3-5] バラドヴァージャ、アーユルヴェーダを学ぶためインドラ神の館へ赴く 003
- [6-7] 聖仙たち、会議を開く 004
- [8-14] 集結した聖仙たちの名前 004
- [15-19] 討論 005
- [20-22] バラドヴァージャ、インドラ神の面前で教えを請う 006
- [23-26] インドラ神、バラドヴァージャにアーユルヴェーダを伝授する 006
- [27-29] アーユルヴェーダ、地上へ伝授される 007
- [30-31] アートレーヤ(プナルヴァス)の6人の弟子 007
- [32-33] アグニヴェーシャ、最初に教本を著わす 007
- [34-40] 6人の弟子の教本、大聖仙を喜ばせる 008

生命とアーユルヴェーダについて009

- [41] アーユルヴェーダの定義 009
- [42] 生命[アーユス]の定義と別名 009
- [43] アーユルヴェーダは神聖な学問 009

世界を構成する6つの原理010

- [44-45] 類似の原則[サーマーニャ]と相違の原則[ヴィシェーシャ] 010
- [46-47] アーユルヴェーダの主題 010
- [48] 9種の物質(世界の成因)：生物と無生物 010
- [49] 属性[グナ]と作用[カルマ] 011
- [50] 分離不可能な結合[サマヴァーヤ]の定義 011
- [51] 物質[ドラヴィヤ]の定義 011
- [51] 属性[グナ]の定義 012
- [52] 作用[カルマ]の定義 012

病気と健康012

- [53] アーユルヴェーダの目的 012
- [54] 病気の3種の原因 012
- [55] 病気発生の2つの場と健康の原因 013
- [56] 我[アートマン]の定義 013

身体的ドーシャと精神的ドーシャ013

- [57] 3種の身体的ドーシャと2種の精神的ドーシャ 013
- [58] ドーシャの鎮静法 014
- [59-61] ヴァータ、ピッタ、カパの属性と鎮静法 014
- [62-63] 治療可能な病気と不治の病の対処法 014

味[ラサ]の定義と組成015

- [64] 味[ラサ]の定義と五大元素[マハーブータ] 015
- [65] 味[ラサ]の種類 015
- [66] ドーシャを増減させる味 015

物質の分類016

- [67] 効能による薬物の分類 016
- [68] 起源による薬物の分類 016
- [68-69] 動物起源の薬物 016
- [70] 土壌起源の薬物 016
- [71-73] 植物起源の薬物：植物の4分類と使用部分 017

主な薬物017

- [74-76] 要約 017
- [77-79] 16種の根が有用な薬用植物の名称と作用 018
- [80-85] 19種の果実が有用な薬用植物の名称と作用 019
- [86-87] 4種の主要な油脂の名称と作用 019
- [88-91] 5種の塩の名称と作用 020
- [92-104] 8種の尿の名称と作用 021
- [105-113] 8種の乳の名称と作用 022

浄化療法に有効な樹木024

- [114-115] 乳液を使用する3種の樹木とその作用 024
- [116-118] 樹皮を使用する3種の樹木とその作用 024
- [119] まとめ 024
- [120-123] 薬物の知識と正しい使用の重要性 025
- [124-125] 薬物の知識がないことによる害悪 025
- [126-132] にせ医者を排斥せよ 025
- [133] 医者を志願する者がすべきこと 026
- [134-135] 最良の薬物と最高の医者 026
- [136-140] 第1章のまとめ 027

第2章 「アパーマールガの種子…」の章

(パンチャカルマ用植物と28種の薬用粥)

5種の浄化療法〔パンチャカルマ〕に用いる薬用植物……………029

- [3-6] 経鼻頭部浄化法〔シローヴィレーチャナ〕に用いる薬用植物 029
- [7-8] 催吐法〔ヴァマナ〕に用いる薬用植物 030
- [9-10] 催下法〔ヴィレーチャナ〕に用いる薬用植物 030
- [11-13] 煎剤経腸法〔アースターバナ〕に用いる薬用植物 031
- [14] 油剤経腸法〔アヌヴァーサナ〕に用いる薬用植物 031
- [15] 5種の浄化療法〔パンチャカルマ〕の前処置 032
- [16] 実践は理論より優る 032

28種の薬用粥 [17-33]……………032

- [34-35] 第2章のまとめ 036
- [36] 医療に適している医者 036

第3章 「アーラグヴァダ…」の章 (32種の泥膏)

32種の泥膏……………037

- [3-17] 皮膚病を治す15種の泥膏 037
- [18-20] ヴァータ性疾患を治す5種の泥膏 040
- [21-22] 痛風を治す3種の泥膏 041
- [23-24] 頭痛を治す2種の泥膏 042
- [25] 側胸痛を治す泥膏 042
- [26-27] 熱感を除去する2種の泥膏 043
- [28] 悪感を除去する泥膏 043
- [28] 毒を除去する泥膏 043
- [29(1)] 皮膚病と多汗症を治す泥膏 044
- [29] 身体の悪臭を除去する泥膏 044
- [30] 第3章のまとめ 044

第4章 「600種類の浄化剤…」の章 (50種の煎剤群)

600種類の浄化剤など……………045

- [3] 本章の要約 045
- [4] 600種類の浄化剤 045
- [5] 6種類の浄化成分含有部位 046
- [6] 5種類の煎剤薬効源 046
- [7] 5種類の煎剤製剤法とその効き目の強さの順序 046
- [8] 50種類の煎剤群(薬効による分類) 047

- [9] 第1群：(1番)延命薬10種 049
 - (2番)滋養薬10種 049
 - (3番)やせ薬10種 049
 - (4番)通じ薬10種 050
 - (5番)癒合促進薬10種 050
 - (6番)消化力増進薬10種 050
- [10] 第2群：(7番)体力増進薬10種 051
 - (8番)色つや向上薬10種 051
 - (9番)のどによい薬10種 051
 - (10番)強壯薬10種 051
- [11] 第3群：(11番)満腹感除去薬10種 052
 - (12番)痔疾薬10種 052
 - (13番)皮膚病薬10種 052
 - (14番)止痒薬10種 053
 - (15番)駆虫薬10種 053
 - (16番)解毒薬10種 053
- [12] 第4群：(17番)催乳薬10種 054
 - (18番)母乳浄化薬10種 054
 - (19番)精液形成促進薬10種 054
 - (20番)精液浄化薬10種 055
- [13] 第5群：(21番)油剤補助薬10種 055
 - (22番)発汗補助薬10種 055
 - (23番)催吐補助薬10種 056
 - (24番)催下補助薬10種 056
 - (25番)煎剤経腸法補助薬10種 056
 - (26番)油剤性経腸法補助薬10種 057
 - (27番)経鼻頭部浄化補助薬10種 057
- [14] 第6群：(28番)制吐薬10種 057
 - (29番)口渴抑止薬10種 058
 - (30番)しゃっくり抑止薬10種 058
- [15] 第7群：(31番)秘結薬10種 058
 - (32番)便色回復薬10種 059
 - (33番)抗利尿薬10種 059
 - (34番)尿色回復薬10種 059
 - (35番)利尿薬10種 059
- [16] 第8群：(36番)鎮咳薬10種 060
 - (37番)呼吸困難除去薬10種 060
 - (38番)消炎薬10種 060
 - (39番)解熱薬10種 061
 - (40番)疲労回復薬10種 061
- [17] 第9群：(41番)灼熱感鎮静薬10種 061
 - (42番)引熱薬10種 062
 - (43番)蕁麻疹鎮静薬10種 062
 - (44番)四肢筋肉痛鎮静薬10種 062

(45番) 疝痛鎮静薬10種 063
 [18] 第10群：(46番) 止血薬10種 063
 (47番) 鎮静薬10種 063
 (48番) 蘇生薬10種 064
 (49番) 妊娠促進薬10種 064
 (50番) 老化遅延薬10種 064

追記.....065

[20] 薬剤の列挙数を500にした理由 065
 [21-22] 煎剤の数が500を満たしていない理由 065
 [23-28] 第4章のまとめ 066
 [29] 最高の名医(大医王[ピシャグヴァラ]) 066

स्वस्थचतुष्कः

II 健康法に関する四章群

第5章 「適量を食べる…」の章 (毎日の健康法)

[3-4] 食事の適量とその尺度 071

重性の食品と軽性の食品.....071

[5] 軽性の食品と重性の食品の食事量 071
 [6] 重性の食品と軽性の食品の適量 072
 [7] 重性および軽性の食品の摂取量 072
 [8-9] 適量の食事の効果 073
 [10-12] 控えるべき食品と常食すべき食品 073
 [13] 病気予防の重要性 073

毎日の健康法 [ディナ・チャリヤー]074

[15-19] 眼軟膏塗布 074
 [20-55] 薬用喫煙 075
 (1) 常用[プラーヨーギカ]の棒状薬用喫煙剤に用いる生薬 075
 (2) 棒状薬用喫煙剤[ドゥーマ・ヴァルティ]の作り方 075
 (3) 油性の棒状薬用喫煙剤に用いる生薬 076
 (4) 頭部浄化用の棒状薬用喫煙剤に用いる生薬 076
 (5) 薬用喫煙の効果 076
 (6) 薬用喫煙の適時と適切な薬用喫煙 077
 (7) 薬用喫煙の副作用とその治療 077
 (8) 薬用喫煙の禁忌 078
 (9) 薬用喫煙の方法 079

(10) 煙管の大きさ 079
 (11) 適切な薬用喫煙と不適切な薬用喫煙の徴候 079
 [56-70] 経鼻法(鼻腔への油剤滴下) 080
 (1) アスタイラを使用する季節とアスタイラ使用の効果 080
 (2) アスタイラの製法 081
 (3) アスタイラの使用法 082
 [71-72] 歯磨きの方法とその効果 082
 [73] 歯を浄化するのに適した樹木 082
 [74-75] 舌磨きとその効果 083
 [76-77] 生薬を口に含む効果(口中清涼剤) 083
 [78-80] 口いっばいに油を含む(油剤によるうがい) 083
 [81-83] 頭の塗油の効果 084
 [84] 外耳道への油剤の注入[カルナ・タルバナ]の効果 084
 [85-89] オイルマッサージ[アビヤンガ]の効果 084
 [90-92] 足のオイルマッサージ[パーダ・アビヤンガ]の効果 085
 [93] 身体の清拭の効果 085
 [94] 入浴の効果 086
 [95] 清潔な衣服を着る効果 086
 [96] 香料、花飾りを身につける効果 086
 [97] 宝飾品を身につける効果 086
 [98] 足などの洗浄の効果 086
 [99] 散髪、爪切りなどの効果 087
 [100] 履物着用の効果 087
 [101-102] 日傘、杖などを使用する効果 087

追記.....087

[103] 健康管理の重要性 087
 [104] 学問と仕事の両立 088
 [105-111] 第5章のまとめ 088

第6章 「人が食べた…」の章 (季節の健康法)

[3] 季節との順応[リトゥ・サートミヤ] 091
 [4] 季節と1年の区分 091
 [5] 放出期と吸収期の特徴 092
 [6] 吸収期に人間の体力が低下する理由 092
 [7] 放出期に人間の体力が増進する理由 093
 [8] 吸収期・放出期の体力の増減の順序 093

季節の健康法 [リトゥ・チャリヤー]093

[9-16] 初冬の健康法 093
 [17-21] 厳冬の健康法 095
 [22-26] 春の健康法 095
 [27-32] 夏の健康法 096

[33-40] 雨季の健康法 097

[41-48] 秋の健康法 098

順応[サートミヤ]099

[49] オーカ・サートミヤの定義 099

[50] 環境への順応、疾病への順応 099

[51] 第6章のまとめ 099

第7章 「生理的衝動を抑えてはいけない…」の章

生理的衝動.....101

[3-5] 13の生理的衝動 101

[6-7] 排尿を抑えることによる症状とその治療 102

[8-9] 排便を抑えることによる症状とその治療 102

[10-11] 精液の停滞による症状とその治療 102

[12-13] 放屁を抑えることによる症状とその治療 103

[14-15] 嘔吐を抑えることによる症状とその治療 103

[16-17] くしゃみを抑えることによる症状とその治療 103

[18] げっぷを抑えることによる症状とその治療 104

[19] あくびを抑えることによる症状とその治療 104

[20] 空腹を抑えることによる症状とその治療 104

[21] 口渇を抑えることによる症状とその治療 104

[22] 涙を抑えることによる症状とその治療 105

[23] 睡眠を抑えることによる症状とその治療 105

[24-25] 激しい運動後の息切れを抑えることによる症状とその治療 105

[26-29] 抑えるべき衝動 105

[30] 無分別などの衝動を抑制する効果 106

運動.....106

[31-33] 運動の定義とその効果、やり過ぎた時の症状 106

[34] 過剰に実行するとよくない習慣 107

[35] 過剰な実行による症状 107

[35] 運動をしてはいけない人 107

悪習の断ち方108

[36-37] 悪習を断つための段階的方法 108

[38] 悪習を断つための段階的方法の効果 108

体質[デーハ・ブラクリティ]108

[39-40] 体質[デーハ・ブラクリティ]の定義 108

[41] 健康な人はすべての味を均等に用いるのがよい 109

老廃物の増減109

[42] 老廃物の通路 109

[43] 老廃物の増減 109

[44] 老廃物の増減の治療 109

[45] 健康法を実践する理由 110

内因性疾患と外因性疾患.....110

[46-50] 内因性疾患の予防法 110

[51-52] 外因性疾患の原因、知的過失 111

[53-54] 外因性疾患の予防法 111

[55] 病気の予防と治療に必要な要因 111

[56-57] 避けるべき人 112

[58-59] 交際すべき人 112

[60] 有益なことを実践するために最善の努力を 112

[61] 発酵乳[ダディ]の摂取法 112

[62] 発酵乳[ダディ]の摂取法に反したときの症状 113

[63-66] 第7章のまとめ 113

第8章 感覚機能序説の章

[3] 感覚機能の要点 115

精神[マナス]115

[4] 精神[マナス]の定義 115

[5] 一人に一つの精神 116

[6] 気質の決め方 116

[7] 知覚には精神と感覚の連携が必要 116

感覚機能[インドリヤ]：**5つの五個一組**117

[8] 5つの感覚機能 117

[9] 5つの感覚機能に関連する物質 117

[10] 5つの感覚器官 117

[11] 5つの感覚対象 117

[12] 5つの感覚認識 117

マナスとインドリヤの相関性118

[13] 我に付随する要素と性質 118

[14] 感覚機能と優勢な元素 118

[15] 感覚機能の変動は精神の変動を伴う 118

[16] 精神の対象 119

善行[サドグリッタ]119

[17] 感覚機能と精神を健全に 119

- [18] 善行：しなくてはいけないこと 120
- [19-27] 悪事：してはいけないこと 121
- [28-29] 神の祝福を受ける方法 126
- [30-33] 第8章のまとめ 127
- [34] その他の善行 127

निर्देशचतुष्कः

Ⅲ 基本事項の訓示に関する四章群

第9章 治療の四本柱の概略の章

治療の四本柱と健康、病気、治療の定義	131
[3] 治療の四本柱 131	
[4] 健康と病気の定義 131	
[5] 治療の定義 132	
治療の四本柱に必要な四条件	132
[6] 医者 の 資 質 と 条 件 132	
[7] 治療薬の条件 132	
[8] 看護人の資質と条件 132	
[9] 患者の資質と条件 133	
医者について	133
[10-14] 四本柱のうち医者が最重要である理由 133	
[15-17] 無知な医者 の 害 悪 134	
[18] 生命の救済者たる医者 の 定 義 134	
[19] 名医の定義 134	
[20-25] 医者 の 義 務 135	
[26] 医の倫理の四条件 136	
[27-28] 第9章のまとめ 136	

第10章 治療の四本柱の詳細の章

治療の役割に関する討論	137
[3] アートレーヤの主張 137	
[4] マイトレーヤの反論 137	
[5(1-4)] アートレーヤの結論 138	
[5] 熟練者は調査する 139	
[6] 治療の原則 139	

- [7-8] 治療で名声を得る方法 140

予後	140
[9-10] 治る病気と治らない病気の分類 140	
[11-13] 治りやすい病気の定義 141	
[14-16] 治りにくい病気の定義 141	
[17-18] 緩和可能な病気の定義 142	
[19-20] 治療放棄すべき病気の定義 142	
[21-22] 鑑別の重要性 142	
[23-24] 第10章のまとめ 143	

第11章 3つの探求〈念願〉の章

3つの探求	145
[3] 3つの探求とは 145	
[4] 1番目は生命の探求 145	
[5] 2番目は富の探求 146	
[6] 3番目は来世の探求 146	
我[アートマン]と来世の存在に関する議論	147
[7-13] 我[アートマン]と来世の存在の証明 147	
[14-16] 無神論を排斥する理由 149	
4つの検討法と再生説	149
[17] 4つの検討法 149	
[18-19] 信頼すべき大家の定義 149	
[20] 直接観察の定義 150	
[21-22] 推論の定義 150	
[23-25] ユクティの実例と定義 150	
[26] 正当な論議による結論 151	
[27-29] 再生を肯定する聖典 151	
[30] 直接観察による再生説の証明 152	
[31] 推論による再生説の証明 153	
[32] ユクティによる再生説の証明 153	
[33] 正しい行い(義務) 153	

7つの三つ組	154
[34] 7つの三つ組とは 154	
[35] 生命を維持する3本の支柱 154	
[36] 3種類の体力 154	
[37(1)] 3種類の病因 155	
[37] 感覚機能の対象との不健康な接触 155	
[38] 触覚機能の遍在性 156	

- [39-41] 行為に関する過剰接触、無接触、過誤接触 157
- [42] 季節の過剰、季節の不足、季節の異変 157
- [43] 病気の原因の要約 158
- [44] あらゆる物事の快調・不調の原因 158
- [45] 3種類の病気(内因性・外因性・心因性) 158
- [46] 心因性疾患の予防法 159
- [48] 3種類の病路(外病路・中間病路・内病路) 159
- [49(1)] 末端系の疾患 160
- [49(2)] 中間病路の疾患 160
- [49] 腹部の疾患 161
- [50-53] 3種類の医者 161
- [54-55] 3種類の療法 161
- [56-63] 賢い者と愚かな者 162
- [64-65] 第11章のまとめ 163

第12章 「ヴァータの長所と短所…」の章

- [3] 大聖仙たちのヴァータに関する質問 165

ヴァータの増悪・鎮静とその作用機序……………166

- [4] ヴァータの6つの属性 166
- [5] ヴァータの増悪 166
- [6] ヴァータの鎮静 166
- [7] 増悪・鎮静の作用機序 167

身体内と自然界のヴァータ……………167

- [8(1)] 身体内ヴァータの正常時の作用 167
- [8(2)] 身体内ヴァータの増悪時の作用 168
- [8(3)] 自然界ヴァータの正常時の作用 168
- [8(4)] 自然界ヴァータの増悪時の作用 169
- [8] ヴァーユ神への賛辞 169

質疑応答……………170

- [9-10] マリーチの質問とヴァーリヨーヴィダの返答 170
- [11] ピッタの作用 170
- [12] カバの作用 171
- [13-15] アートレーヤの結論 171
- [16-17] 第12章のまとめ 172

कल्पनाचतुष्कः

IV 準備に関する四章群

第13章 油剤法の章

- [3-8] 油剤法に関するアグニヴェーシャの質問 175

4種の良質の油剤とその性質、適用、使用法……………176

- [9] 油剤の原料は2種類 176
- [10] 植物性油剤の原料 176
- [11] 動物性油剤の原料 177
- [12] ごま油とひまし油の性質 177
- [13] 油脂類ではギーが最も優秀 177
- [14] ギーの性質 178
- [15] 植物性油の性質 178
- [16] 獣脂の性質 178
- [17] 髓脂の性質 178
- [18(1)] 季節と油脂類 179
- [18-19] 油剤服用の時期と適用者に関する規則 179
- [20-21] 規則違反による弊害 179
- [22] 油剤法の補助飲料[アヌバーナ] 179

調合油剤……………180

- [23-28] 油剤法に用いる24種類の調合油剤 180
- [29] 油剤の3種類の用量 181
- [30-34] 最大量の油剤が適用される人と最大量服用の効能 181
- [35-37] 中間量の油剤が適用される人と中間量服用の効能 182
- [38-40] 少量の油剤が適用される人と少量服用の効能 182
- [41-43] ギー服用の適用例 182
- [44-46] ごま油服用の適用例 183
- [47-49] 獣脂服用の適用例 183
- [50] 髓脂服用の適用例 184
- [51] 油剤服用期間 184
- [52] 油剤法をすべき人 184
- [53-56] 油剤法をしてはいけない人 184
- [57] 油剤法不足の徴候 185
- [58] 適切な油剤法の徴候 185
- [59] 過剰な油剤法の徴候 185
- [60] 油剤服用の前日の食事 186
- [61] 浄化用と鎮静用油剤の服用適時 186
- [62-64] 油剤服用時にすべきことと禁忌 186

[65-69] 下痢傾向の人と便秘傾向の人の定義	186
[70-72] 油剤服用によるのどの渇きの治療	187
[73] 油剤の消化不良によるのどの渇きの治療	188
[74-76] 誤った油剤法による副作用の症状	188
[77-78] 誤った油剤法による副作用の治療	188
[79] 誤った油剤法による副作用の原因	189
[80] 浄化油剤法のための食生活	189
[81] 鎮静油剤法のための食事箋(調合油剤)	189
[82-90] 調合油剤の対象者	190
[91] 皮膚病やその他の病気の人が避けるべき調合油剤	191
[92-95] 皮膚病やその他の病気の人のための調合油剤	191
[96-97] 急激な油剤投与の弊害	192
[98] 塩を添加した油剤の特長	192
[99] 油剤法、発汗法の順序	193
[100] 第13章のまとめ	193

第14章 発汗法の章

発汗法について195

[3-5] 発汗法の効果	195
[6] 発汗法の有効性	196
[7-10] 病気に応じた発汗法の処方	196
[11-12] 目と心臓部の保護	196
[13] 適切な発汗の徴候	197
[14-15] 過剰な発汗の徴候とその治療	197
[16-19] 発汗法をしてはいけない人	197
[20-24] 発汗法の適応症	198

発汗法の材料199

[25-27] ピンダ・スヴェーダナとプラスタラ・スヴェーダナに用いる材料	199
[28] プー、クティ、ジェーンターカ・スヴェーダナの材料	199
[29-33] ナーディー・スヴェーダナの材料	199
[34] アヴァガーハナとパリシェーカ(灌注法)の材料	200
[35-36] ウパナーハ・スヴェーダナの材料	200
[37-38] ウパナーハ・スヴェーダナの固定布の材料と貼付時間	201

火を用いる発汗法201

[39-40] 13種の発汗法	201
[41] サンカラ・スヴェーダナ	202
[42] プラスタラ・スヴェーダナ	202
[43] ナーディー・スヴェーダナ	202
[44] パリシェーカ・スヴェーダナ	203
[45] アヴァガーハ・スヴェーダナ	203

[46] ジェーンターカ・スヴェーダナ	203
[47-49] アシュマガナ・スヴェーダナ	205
[50-51] カルシユー・スヴェーダナ	206
[52-54] クティ・スヴェーダナ	206
[55] プー・スヴェーダナ	206
[56-58] クンビー・スヴェーダナ	207
[59-60] クーパ・スヴェーダナ	207
[61-63] ホーラーカ・スヴェーダナ	207

その他の発汗法208

[64] 10種類の火を用いない発汗法	208
[65-66] 3対6種類の発汗法	208
[67] 発汗法後の注意	208
[68-71] 第14章のまとめ	209

第15章 医療用品の準備の章

[3-5] 催吐法などのための医療用品の準備	211
[6-7] 準備すべき医療用品	212
[8] 催吐法の前処置	215
[9] 吐剤服用手順	215
[10] 吐剤の適量	215
[11-12] 吐剤服用後の処置	216
[13(1-4)] 適切または不適切な催吐法の症状	217
[13] 不十分または過剰な催吐法による副作用	217
[14-15] 催吐法の後療法	218
[16] 嘔吐後の食事	218
[17] 下剤服用手順	219
[18] 浄化法を受ける資格	220
[19-21] 所定の医療用品がなくても浄化法は可能	220
[22] 浄化法の効果	221
[23-25] 第15章のまとめ	221

第16章 「治療に優れた医者…」の章

[3] 有能な医者による浄化法の効能	223
[4] 無能な医者による浄化法の弊害	223
[5-6] 適切な浄化法後の症状	224
[7-8] 不十分な浄化法後の症状	224
[9-10] 過剰な催下法後の症状	224
[11-12] 過剰な催吐法後の症状	225
[13-16] 浄化法の適応症	225
[17-19] 浄化法の効能	225
[20-21] 浄化法が緩和療法より優秀な理由	226

[22-23] 浄化法後の養生 226
 [24-25] 過剰および不十分な浄化法の治療 227
 [26] 誤った方法で行われた油剤法などの対処法 227
 [27-28] 生命の停止は自然の成り行き 227
 [29-30] 治療の目的に関するアグニヴェーシャの質問 227
 [31-33] アートレーヤの返答 228
 [34] 治療の定義 228
 [35-36] 治療の目的 228
 [37-38] 有能な医者 of 長所 229
 [39-41] 第16章のまとめ 229

रोगचतुष्कः

V 疾患に関する四章群

第17章 「頭部疾患は何種類…」の章 (種々の疾患)

[3-4] アグニヴェーシャによる質問 233
 [5-7] アートレーヤの返答 233

5種類の頭部疾患.....234

[8-12] 頭部疾患の原因および頭部の重要性 234
 [13-14] 頭部疾患の名称 235
 [15-21] ヴァータ性頭部疾患の診断と症状 235
 [22-23] ピッタ性頭部疾患の診断と症状 236
 [24-25] カパ性頭部疾患の診断と症状 236
 [26] 3 トリドーシャ性頭部疾患の診断と症状 237
 [27-29] 寄生虫による頭部疾患の診断と症状 237

5種類の心疾患.....237

[30-31] ヴァータ性心疾患の診断と症状 237
 [32-33] ピッタ性心疾患の診断と症状 238
 [34-35] カパ性心疾患の診断と症状 238
 [36] 3 トリドーシャ性心疾患の診断と症状 238
 [36-40] 病原菌による心疾患の診断と症状 239

62種類のドーシャの増減による症状.....239

[41-44] 62種類のドーシャの増減の組み合わせ 239
 [45-61] ドーシャの増減による症状 240
 (1) ヴァータが増悪しているとき 240

(2) ピッタが増悪しているとき 240
 (3) カパが増悪しているとき 241
 (4) ヴァータが減少しているとき 241
 (5) ピッタが減少しているとき 241
 (6) カパが減少しているとき 242
 (7) ヴァータとピッタが減少しているとき 242
 (8) ヴァータとカパが減少しているとき 242
 (9) ピッタとカパが減少しているとき 242
 [62] ドーシャの増悪・減少・平衡 243

18種類のダートゥ減少[クシャヤ]による症状.....243

[63] ダートゥ減少[クシャヤ]による症状の分類 243
 [64-69] ダートゥ(身体構成要素)の減少による症状 243
 [70-72] マラ(老廃物)の減少による症状 244
 [73] オージヤス(活力素)の減少による症状 244
 [74-75] オージヤス(活力素)の定義 245
 [76-77] オージヤス(活力素)減少の原因 245

糖尿病に伴う7種類の膿疱.....246

[78-81] 糖尿病の原因と症状 246
 [82] 未治療の糖尿病に見られる膿疱 246
 [83-90] 7種類の膿疱の名称と形状 247
 (1) シャラーヴィカー型(皿型<噴火口型潰瘍>)の形状 247
 (2) カッチャピカー型(亀の甲型<癰>)の形状 247
 (3) ジャーリーニー型(網目型<篩>)の形状 247
 (4) サルシャビー型(辛子粒型<小膿疱>)の形状 248
 (5) アラジー型(火炙り型<乾性壊疽>)の形状 248
 (6) ヴィナター型(陥没型<湿性壊疽>)の形状 248
 (7) ヴイドラディ(膿瘍)の形状 248
 [91-94] 内部の膿瘍の病因 248
 [95-97] 膿瘍の定義と症状 249
 [98-100] 成熟した膿瘍の症状と内容物 250
 [101-102] 発症部位に特有な症状 250
 [103] 膿瘍の診断と治療 251
 [104-107] 膿疱の予後 251
 [108-110] その他の膿疱 252
 [111] 膿疱の合併症 252

14種のドーシャの進路.....252

[112-113] 3種のドーシャの三進路 252
 [114] 季節変動によるドーシャの三進路 253
 [115-118] 機能別のドーシャの二進路 253
 [119] 長寿の秘訣 254
 [120-121] 第17章のまとめ 254

第18章 3種の腫脹〈浮腫〉の章

[3] 腫脹[ショータ]の分類 255

外因性腫脹.....255

[4] 外因性腫脹の原因 255

[5] 外因性腫脹の治療 256

内因性腫脹.....256

[6] 内因性腫脹の一般的原因 256

[7(1)] ヴァータ性腫脹の原因と症状 257

[7(2)] ピッタ性腫脹の原因と症状 258

[7(3)] カパ性腫脹の原因と症状 258

[7] 2^{ドワイ}ドーシャ性および3^{トリ}ドーシャ性腫脹 259

[8] 腫脹の別の分類 259

[9-15] 各腫脹の定義

(1) ヴァータ性腫脹の定義 259

(2) ピッタ性腫脹の定義 259

(3) カパ性腫脹の定義 260

(4) 2^{ドワイ}ドーシャ性と3^{トリ}ドーシャ性腫脹の定義 260

[16-17] 難治性腫脹の好発部位 260

[18] 腫脹の合併症 261

[19-22] カパ性腫脹の発病機序 261

[23-27] ピッタ性腫脹の発病機序 261

[28-32] ヴァータ性腫脹の発病機序 262

[33] その他の腫脹 263

[34-36] 3^{トリ}ドーシャ性腫脹の発病機序 263

治療の留意点.....263

[37-41] 予後による疾患の分類 263

(1) 重症の疾患(難治[クリッチュラ・サーディヤ]) 263

(2) 軽症の疾患(治り易い[スカ・サーディヤ]) 264

(3) 軽症の不治の疾患(緩和可能[ヤーピヤ]) 264

(4) 重症の不治の疾患(治療放棄すべきもの[プラティヤーキエーヤ]) 264

[42-43] 無数の疾患 264

[44-47] 3つの要点 265

[48] 生理的ドーシャと病的ドーシャ 265

[49-51] 生理的ドーシャの機能 265

[52-53] 病的ドーシャの症状 266

[54-56] 第18章のまとめ 266

第19章 「8種類の腹部疾患…」の章 (48疾患)

[3] 48疾患の列挙 269

[4(1)] (1) 8種類ずつある4疾患(腹部疾患、排尿困難、母乳異常、精液異常) 270

[4(2)] (2) 7種類ずつある3疾患(クシュタ、ピダカー、ヴィサルバ) 271

[4(3)] (3) 6種類ずつある2疾患(下痢、ウダーヴァルタ) 271

[4(4)-1] (4-1) 5種類ずつある12疾患(グルマ、脾臓疾患、咳、呼吸困難、しゃっくり、口渴) 271

[4(4)-2] (4-2) 5種類ずつある12疾患(嘔吐、食欲不振、頭部疾患、心疾患、貧血、精神異常) 272

[4(5)] (5) 4種類ずつある10疾患(てんかん、眼疾患、耳疾患、急性鼻炎、口腔疾患、グラハニー病、酪酊、失神、消耗性疾患、勃起不能) 272

[4(6)] 3種類ずつある3疾患(浮腫、白斑、出血) 273

[4(7)] 2種類ずつある8疾患(発熱、創傷、拘縮、坐骨神経痛、黄疸、消化不良、痛風、痔核) 273

[4(8)] 1種類だけの3疾患(痙性対麻痺、昏睡、神経症) 274

[4(9)-1-3] 20種類ずつある3疾患(寄生虫症、尿疾患、女性性器疾患) 274

[5-6] 内因性疾患とドーシャの関係 276

[7] 内因性疾患と外因性疾患の関係 276

[8-9] 第19章のまとめ 277

第20章 主要疾患の章 (140種の単一ドーシャ性疾患)

[3] 4種類の疾患、2種類の疾患、無数の疾患 279

[4] 外因性疾患と内因性疾患の原因 279

[5] 共通の誘因 280

[6] 4種類の疾患の症状の併発 280

[7] 外因性疾患と内因性疾患の相違点 280

[8] ドーシャの領域区分 280

[9] ドーシャが正常なとき、異常なとき 281

[10] 共通疾患と個別疾患 281

[11] 80種類のヴァータ性疾患 282

[12] ヴァータの属性と症状 283

[13] ヴァータ増悪の治療 284

[14] 40種類のピッタ性疾患 284

[15] ピッタの属性と症状 285

[16] ピッタ増悪の治療 286

[17] 20種類のカパ性疾患 286

[18] カパの属性と症状 287

[19] カパ増悪の治療 287

[20-22] 診断の重要性 288

[23-25] 第20章のまとめ 288

VI 栄養管理に関する四章群

第21章 8種類の望ましくない体格の章 (肥満とやせすぎ)

- [3] 8種類の身体上の問題点 293
- [4] 肥満の特徴、原因、症状 293
- [5-9] 肥満になる仕組みと定義 294
- [10-14] やせすぎの原因と症状 295
- [15] やせすぎの定義 296
- [16-17] 肥満とやせすぎの比較 296
- [18-19] 均整のとれた体格 296
- [20] 肥満とやせすぎの治療方針 296
- [21-28] 肥満の治療 297
- [29-33] やせすぎの予防 298
- [34] 肥る要因 298
- [35] 睡眠の原因 299
- [36] 睡眠の効果 299
- [37-38] 不適切な睡眠、適切な睡眠 299
- [39-43] 昼寝のすすめ 299
- [44-49] 昼寝の禁止 300
- [50] 夜更かし、昼寝、坐位の睡眠の特徴 301
- [51] 肥満とやせすぎは睡眠と食物から 301
- [52-54] 不眠の治療 301
- [55-56] 過剰睡眠の治療 301
- [57] 不眠の原因 302
- [58-59] 睡眠の分類 302
- [60-62] 第21章のまとめ 302

第22章 減量法と滋養法の章 (6種の療法)

- [3-4] 6種の療法(減量法、滋養法、乾剤法、油剤法、発汗法、停滞法) 305
- [5-8] 6種の療法に関するアグニヴェーシャの質問 306
- [9-11] 6種の療法の定義 306
- [12-17] 6種の療法に用いる薬剤 307
- [18] その他の10種類の減量法[ランガナ] 307
- [19-24] 種々の減量法[ランガナ]の実施法 308
- [25] 肉類は最良の滋養薬 308
- [26-28] 滋養法[プリンハナ]の応症 309
- [29-31] 乾剤法[ルークシャナ]の適応症 309
- [32-33] 停滞法[スタンバナ]の適応症 310

- [34-37] 適正な減量法と過剰な減量法 310
- [38] 適正な滋養法と過剰な滋養法 310
- [39(前半)] 適正な乾剤法と過剰な乾剤法 311
- [39-40] 適正な停滞法と過剰な停滞法 311
- [41-43] 6種の療法のまとめ 311
- [44] 第22章のまとめ 312

第23章 栄養過多〈高栄養法〉の章 (高栄養法と瘦躯法)

- [3-4] 栄養過多になる原因 313
- [5-7] 栄養過多による疾患 313
- [8-25] 栄養過多による疾患の治療法 314
- [26-29] 栄養不足[アバタルバナ]による疾患 316
- [30-31] 栄養不足[アバタルバナ]の治療法 317
- [32-33] 慢性のやせすぎの治療 317
- [34-37] 滋養飲料[タルバナ]の処方 318
- [38] 酒による病気を治すマンタ(香煎飲料) 318
- [39] 即効性のサンタルバナ・マンタ(滋養香煎飲料) 318
- [40] 第23章のまとめ 319

第24章 適切に造られた血液の章 (造血のしくみと意識障害)

清浄な血液と悪化した血液321

- [3-4] 健康的な生活と清浄な血液 321
- [5-10] 血液悪化の原因 322
- [11-17] 悪化した血液に起因する病気(血液性疾患) 322
- [18-19] 血液性疾患の治療 323
- [20-21] 各ドーシャによって悪化した血液の特徴 323
- [22] 清浄な血液の色 324
- [23] 瀉血後の食事 324
- [24] 清浄な血液をもつ人の特徴 324

意識障害325

- [25-29] 酩酊、失神、昏睡の発病機序 325
- [30-34] 酩酊[マダ]のドーシャ別の特徴 325
- [35-41] 失神[ムールच्छャー]のドーシャ別の特徴 326
- [42] 昏睡と酩酊・失神との相違点 327
- [43-45] 昏睡の特徴 327
- [46-53] 昏睡の治療 327
- [54-58] 酩酊と失神の治療 328
- [59-60] 第24章のまとめ 329

Ⅶ 飲食物に関する四章群

第25章 人間の源の章 (主要食品、重要事項、84種の薬味酒)

人間と疾患に関する大聖仙たちの会議333

- [3-25] 聖仙たちの議論 333
- [26-29] プナルヴァス・アートレーヤの結論 337
- [30-35] 有益な食物と有害な食物の定義 337

主要食品と重要事項339

- [36] 食品の種類 339
- [37-38] 有益な食品 339
- [39] 有害な食品 340
- [40] 155項目の最重要事項 341
- [41-44] 治療への応用 349
- [45] 健全・不健全[パティヤ・アパティヤ]の定義 349
- [46-47] 状況に応じた治療 350

84種のアーサヴァ(薬味酒)350

- [48-49(1-2)] 9種の材料 350
- [49(3)] 6種の穀物酒 351
- [49(4)] 26種の果実酒 351
- [49(5)] 11種の根酒 351
- [49(6)] 20種の木髓酒 352
- [49(7)] 10種の花酒 352
- [49(8)-(9)] 4種の茎酒と2種の葉酒 352
- [49] 4種の樹皮酒と1種の砂糖酒 353
- [50] アーサヴァ(薬味酒)の効能 353
- [51] 第25章のまとめ 354

第26章 「アートレーヤ、バドラカーピヤ…」の章 (味に関する討論)

味に関する討論355

- [3-7] 討論に参加した大聖仙たち 355
- [8] 味は何種類か 356
- [9] アートレーヤの結論 357

薬物について358

- [10-11] 五大元素に基づく薬物の特徴 358
 - (1) 地元素優勢[パルティヴァ] 359
 - (2) 水元素優勢[アーピヤ] 359
 - (3) 火元素優勢[アグネーヤ] 359
 - (4) 風元素優勢[ヴァーヤヴィヤ] 359
 - (5) 空元素優勢[アーカーシーヤ] 360
- [12] すべての物質が薬 360
- [13] 薬物の作用、効力、作用の場、時、機序、効能 360
- [14-24] 63種類の味 361
- [25-27] 味の処方 362
- [28] ラサ(味)とアヌラサ(隠れた味)の定義 362
- [29-35] 十種の属性(優などの性質[パラディ・グナ]) 362
- [36-37] 文意を汲むこと 364

ラサ(味)について364

- [38-39] ラサ(味)の源 364
- [40] 六味と五大元素 364
- [41] ラサ(味)の動き 365
- [42-44] ラサ(味)の作用と過剰摂取時の副作用 365
 - (1) 甘味の作用と過剰摂取の副作用 365
 - (2) 酸味の作用と過剰摂取の副作用 366
 - (3) 塩味の作用と過剰摂取の副作用 367
 - (4) 辛味の作用と過剰摂取の副作用 368
 - (5) 苦味の作用と過剰摂取の副作用 369
 - (6) 渋味の作用と過剰摂取の副作用 369
- [45-52] ラサ(味)とヴィールヤ(効力(薬力源)) 370
- [53-56] ラサ(味)の属性 372

消化後の味[ヴィパーカ]、効力(薬力源)[ヴィールヤ]、特殊作用[ブラバーヴァ]372

- [57-58] ラサ(味)とヴィパーカ(消化後の味) 372
- [59-60] ラサ(味)と排泄作用 373
- [61-62] ヴィパーカ(消化後の味)と排泄作用とドーシャ 373
- [63] ヴィパーカ(消化後の味)の強弱 373
- [64-65] 8種のヴィールヤ(効力(薬力源))と2種のヴィールヤ(効力(薬力源)) 373
- [66] ラサ(味)、ヴィールヤ(効力(薬力源))、ヴィパーカ(消化後の味)の相違点 374
- [67-72] ブラバーヴァ(特殊作用)とその例 374
- [73-79] 六味の特徴 375

健康を害する食事376

- [80-81] 「不適合食」とは 376
- [82-84] 「食い合わせ」の実例 377
- [85-101] 健康を害する「食い合わせ」 380

- [102-103] 「食い合わせ」による病気 383
- [104-106] 「食い合わせ」による病気の治療 383
- [107-113] 第26章のまとめ 384

第27章 飲食物の摂取規定の章 (飲食物の分類)

- [3] 生命の根源 387
- [4] 飲食物の作用 387
- [5-7] 飲食物の分類 388

第1群：禾穀類 かこくゑい389

- [8-12] シャーリ米類 389
- [13-15] シャシュティカ米類とその他の品種 390
- [16-18] 雑穀 390
- [19-20] 大麦と竹の種子 391
- [21-22] 小麦、オヒシバ、シコクビエ 391

第2群：豆類391

- [23-25] 緑豆、マーシャ、ラージャマーシャ 391
- [26-29] クラッタ、マクシュタカなど 392
- [30-32] 胡麻、フジマメ類 393
- [33-34] キマメ、オランダヒユなど 393

第3群：肉類393

- [35-36] プラサハ(餌をもぎ取って食べる鳥獣) 393
- [37-38] プーミシャヤ(土穴動物) 394
- [39] アーヌーパ・ムリガ(沼沢地生息動物) 394
- [40] ヴァーリシャヤ(水生動物) 395
- [41-44] アンブチャーリン(水禽類) 395
- [45-46] ジャーンガラ・ムリガ(乾地森林動物) 396
- [47-49] ヴィシュキラ(家禽) 396
- [50-52] プラトゥダ(ついでむ鳥類) 397
- [53-55] 肉類分類の命名法 397
- [56-57] 肉類の性質 398
- [58] 肉食鳥獣の性質 398
- [59-60] ウズラなどのヴィシュキラ(家禽)、プラトゥダ(ついでむ鳥類)、ジャーンガラ(乾地森林動物)の肉の性質 398
- [61(1)] ノガンなどのヴィシュキラ(家禽)の肉の性質 399
- [61-62] 山羊肉と羊肉の性質 399
- [63-84] 個別の肉の性質 399
- [85-86] 卵の性質 402
- [87] 肉類は最良の滋養薬 402

第4群：野菜類403

- [88-90] ガジュツ、イヌホウズキなど 403
- [91-93] ツナソ、カタバミ、ツルムラサキ 403
- [94-97] ハリビユ、ツルレイシなど 404
- [98-103] 煮物用野菜 405
- [104-108] サンヘンブ、ベンガルボダイジュなど 406
- [109-113] ゴマ、ベニバナ、キュウリなど 406
- [114-118] スイレン、ハスなど 407
- [119-124] ヤムイモ類、キノコ類など 408

第5群：果実類409

- [125-128] ブドウ、ナツメヤシ、イチジクなど 409
- [129-133] アムラノキ、ココヤシ、モモなど 410
- [134-137] グアバ、セイヨウナシなど 410
- [138-141] ベルノキ、マンゴー、ナツメなど 411
- [142-145] ヤサイカラスウリ、バナナなど 412
- [146-150] インドガキ、ザクロなど 412
- [151-156] タマリンド、シトロン、ダイダイなど 413
- [157-160] アーモンド、ピスタチオ、クルミなど 414
- [161-165] ワイルドマンゴー、レモン、フサナリイチジクなど 415

第6群：生食用野菜類(香味野菜類)416

- [166-169] ショウガ、ダイコンなど 416
- [170-173] アジョワン、レモングラスなど 416
- [174-177] ニンジン、タマネギなど 417

第7群：酒類418

- [178-181] スラー酒、マディラー酒、ジャガラ酒 418
- [182-185] アリシュタ酒、砂糖酒など 418
- [186-189] 含蜜糖酒、アークシキー酒など 419
- [190-192] 大麦濁酒、四国稗酒など 420
- [193-195] 酒の性質 420

第8群：水421

- [196-197] 雨水の属性 421
- [198-200] 雨水と土壌 421
- [201-202] インドラ神の水 422
- [203-206] 季節別の水の属性 422
- [207-208] 季節はずれの雨水と秋の水 423
- [209-212] 河川水の属性 423
- [213-216] その他の水 423

第9群：乳製品424

- [217-220] 牛乳、水牛乳、駱駝乳 424
- [221-224] 奇蹄動物乳、山羊乳、羊乳、母乳 425
- [225-227] ダヒ(発酵乳) 425
- [228-230] 乳清、バターミルク、フレッシュ・バターなど 426
- [231-233] ギー(バターオイル) 426
- [234-236] 初乳、移行乳、チーズ類など 427

第10群：サトウキビ製品と蜂蜜427

- [237] サトウキビ汁 427
- [238-240] 含蜜糖と分蜜糖 428
- [241-242] 精製砂糖の種類 428
- [243-249] 蜂蜜 428

第11群：加熱調理食品430

- [250-252] 汁状粥、糊状粥、重湯 430
- [253-256] 煎り米の汁状粥、重湯、粉 430
- [257-259] 米飯 431
- [260-262] クルマーシャなど 431
- [263-264] サクトゥ(香煎) 432
- [265-267] 穀物粉の料理 432
- [268-270] 肉、野菜などの料理 433
- [271-274] 小麦料理、豆料理 433
- [275-277] 一般的注意、ヴィマルダカ 434
- [278-280] 発酵乳製品、甘味飲料 434
- [281-283] ラーガシャーダヴァ、マンゴーとアンマロクの舐剤 435
- [284-285] 酢酸発酵飲料 435

第12群：調味料436

- [286-288] ごま油 436
- [289-291] ひまし油、からし油、アーモンド油 436
- [292-294] あまに油、べにばな油、その他の植物油 437
- [295] 髓脂と獣脂 437
- [296-299] 干シショウガ、ナガコショウ、黒コショウ、アギ 438
- [300-304] 塩類 438
- [305-306] ヤヴァクシャーラ、クシャーラ 439
- [307-308] 香辛料 439

食品全般の注意事項440

- [309-310] 穀物 440
- [311] 肉類 440
- [312-315] 肉の煮汁 441
- [316-318] 廃棄すべき野菜、果物など 441

食後の飲み物442

- [319-320] ドーシャ別の食後の飲み物 442
- [321-324] 症状別の食後の飲み物 442
- [325-330] 食後の飲み物の作用と性質 443

消化に関する重性・軽性444

- [331-333] 生息場所と食性 444
- [334-335] 食肉の部位 444
- [336-338] 本来の重性・軽性 444
- [339-341] 調理と量による重性・軽性の変化 445
- [342-344] アグニ(消化力)と重性・軽性 445
- [345-350] 食物礼讃 446
- [351-352] 第27章のまとめ 446

第28章 「飲食物の種々の形状…」の章 (飲食物の代謝とダートゥ性疾患)

飲食物の代謝449

- [3-4] 飲食物のゆくえ 449
- [5] 排出物[キッタ]の役割 451
- [6-8] 無益な食事以外の病気の原因 451

身体構成要素別の症状453

- [9-10] 栄養体液の悪化による疾患 453
- [11-12] 血液の悪化による疾患 453
- [13-14] 筋肉の悪化による疾患 454
- [15] 脂肪の悪化による疾患 454
- [16] 骨の悪化による疾患 454
- [17] 骨髄の悪化による疾患 455
- [18-19] 精液の悪化による疾患 455
- [20] 感覚機能の悪化による疾患 455
- [21] 靱帯などの悪化による疾患 455
- [22] 老廃物の悪化による疾患 456

飲食物と健康456

- [23-24] 有益な飲食物のすすめ 456
- [25-30] 身体構成要素別の疾患の治療 456
- [31-33] ドーシャの移動 457
- [34-35] 健康人と病人の違い 458
- [36-40] 賢人と凡人の違い 458
- [41-42] 食事に関する8項目 459
- [43-44] 健康に害があるものは避けるべし 459
- [45-48] 第28章のまとめ 459

Ⅷ 結びの二章

第29章 10の生氣〈生命〉の座の章 (総論篇の全容)

[3-4] 10の生氣〈生命〉の座 463

総論篇の全容と2種の医者464

[5-6] 2種の医者 464

[7(1-2)] 生命の救済者[ブラーナー・ビサラ]の見分け方 464

[7(3-4)] 薬剤に関する四章群(第1章から第4章) 465

[7(5)] 健康法に関する四章群(第5章から第8章) 465

[7(6)] 基本事項の訓示に関する四章群(第9章から第12章) 465

[7(7-8)] 準備に関する四章群(第13章から第16章) 466

[7(9)-1] 疾患に関する四章群(第17章から第20章) 466

[7(9)] 栄養管理に関する四章群(第21章から第24章) 466

[7(10)] 飲食物に関する四章群(第25章から第28章) 466

[7] 結びの2章(第29章と第30章) 467

[8-9] 病気を悪化させる医者の見分け方 467

[10-12] にせ医者を排斥せよ 468

[13] 優秀な医者を尊敬せよ 469

[14] 第29章のまとめ 469

第30章 心臓に根差す十大脈管の章 (本集の全容)

心臓に根差す十大脈管471

[3] 心臓の別名 471

[4-8] 心臓の重要性と十大脈管 472

[9-11] オージヤスの作用 472

[12] シラー、ダマニー、スロータスの語源 473

[13-14] 心臓と十大脈管とオージヤスのために 473

[15] 6事項のもっとも優秀なもの 473

アーユルヴェーダの学習法474

[16-19] アーユルヴェーダの伝達法 474

[20] 8つの質問 475

(1) アーユルヴェーダとアタルヴァヴェーダ 475

(2) アーユスの同義語 475

(3)-1 アーユルヴェーダの定義 476

(3)-2 幸福か不幸かの基準 476

(3)-3 有益か否かの基準 476

(3)-4 尺度の有無 477

(4) アーユルヴェーダの目的 477

(5)-1 アーユルヴェーダの永遠性 478

(5)-2 アーユルヴェーダの永遠性 478

(6) アーユルヴェーダの8部門 479

(7) アーユルヴェーダの学習者 479

(8) アーユルヴェーダを学ぶ目的 479

篇・章の題名480

[30] 医者 of 8つの質問 480

[31] アーユルヴェーダの類義語 480

[32] 本集の主題 480

[33-35] スターナ(篇)の題名 481

[36-46] シェローカ・スターナの章の題名 482

[47] ニダーナ・スターナの章の題名 483

[48-49] ヴィマーナ・スターナの章の題名 483

[50-52] シャーリーラ・スターナの章の題名 484

[53-55] インドリヤ・スターナの章の題名 484

[56-61] チキツァー・スターナの章の題名 485

[62-64] カルパ・スターナの章の題名 486

[65-68] シッディ・スターナの章の題名 486

[69-71] タントラとスターナの語源 487

結び487

[72-83] 不完全な知識しかない6種類の医者 487

[84-85] 苦痛と幸福の源 489

[86-89] 第30章のまとめ 489

索引491

भेषजचतुष्कः

bheṣajacatuṣkaḥ

I

藥劑に関する四章群

prathamo'dhyāyaḥ

CHAPTER 1

第 1 章 「長寿を…」の章

||| athāto dīrghañjīvitīyaṃ adhyāyaṃ vyākhyāsyāmaḥ || [1]

||| iti ha smāha bhagavānātreyaḥ || [2]

それでは「長寿を…」の章を述べよう、と尊者アートレーヤが語り始めた。[1-2]

アーユルヴェーダの成立

バラドヴァージャ、アーユルヴェーダを学ぶためインドラ神の館へ赴く

||| dīrghañjīvitamanvicchanbharadvājaṃ upāgamat |

||| indramugratapā budhvā śaraṇyamamareśvaram || [3]

||| brahmaṇā hi yathāproktamāyurvedaṃ prajāpatiḥ |

||| jagrāha nikhilenādāvaśvinau tu punastataḥ || [4]

||| aśvibhyāṃ bhagavāñchakraḥ pratipede ha kevalam |

||| ṛṣiprokto bharadvājastasmācchakramupāgamat || [5]

長寿を求めて、偉大な苦行者であるバラドヴァージャは神々の中の神であり救世主であるインドラ神の館へ行った。ブラフマー神が説いたアーユルヴェーダを、最初に受け継いだのはプラジャーパティ神である。プラジャーパティ神からアシュヴィン双神へ、アシュヴィン双神からインドラ神[尊いシャクラ]へと、余すところなく伝授された。そういうわけで、聖仙たちから任命されたバラドヴァージャはインドラ神のところへ行ったのであ

る。[4-5]

聖仙たち、会議を開く

vighnabhūtā yadā rogāḥ prādurbhūtāḥ śarīriṇām |
tapopavāsādhyayanabrahmacaryavratāyusām || [6]
tadā bhūteṣvanukrośaṃ puraskṛtya maharṣayaḥ |
sametāḥ puṇyakarmāṇaḥ pārśve himavataḥ śubhe || [7]

人々の苦行[タバ]、断食[ウパヴァーサ]、学習[アディヤヤナ]、禁欲<梵行>[ブラフマチャリヤ]、宗教上の遵守[ヴラタ(誓戒)]、長寿[アーユシャ (=アーユス)]の達成に障害となるさまざまな病気が発生したとき、神聖で偉大な聖仙たちは生命あるものを思いやり、ヒマラヤ山の神聖な場所に集まった。[6-7]

集結した聖仙たちの名前

aṅgirā jamadagniśca vaśiṣṭhaḥ kaśyapo bhṛguḥ |
ātreyo gautamaḥ sānkhyāḥ pulastyo nārado'sitaḥ || [8]
agastyo vāmadevaśca mārkaṇḍeyāśvalāyanau |
pārikṣirbhikṣurātreyo bharadvājaḥ kapiñja(ṣṭha)laḥ || [9]
viśvāmitrāśmarathyau ca bhārgavaścyavano'bhijit |
gārgyaḥ śāṇḍilyakaṇḍilyau(nyau) vārḥkṣirdevalagālavau || [10]

アンギラー、ジャマダグニ、ヴァシシュタ、カシュヤパ、ブリグ、アートレーヤ、ガウタマ、サーンキヤ、プラスティヤ、ナーラダ、アシタ、アガスティヤ、ヴァーマデーヴァ、マールカンデーヤ、アシュヴァラーヤナ、パーリクシ、遊行者のアートレーヤ、バラドヴァージヤ、カピンジャラ、ヴィシュヴァーミトラ、アシュマラティヤ、バールガヴァ、チャヴァナ、アビジト、ガールギヤ、シャーンディリヤ、カウンディリヤ、ヴァールクシ、デーヴァラ、ガーラヴァ、[8-10]

sānkṛtyo baijavāpīśca kuśiko bādarāyaṇaḥ |
baḍiśaḥ śaralomā ca kāpyakātyāyanāvubhau || [11]
kānkāyanaḥ kaikaśeyo dhaumyo māricakāśyapau |
śarkarākṣo hiranyākṣo lokākṣaḥ painḡireva ca || [12]
śaunakaḥ śākuneyaśca maitreyo maimatāyaniḥ |
vaikhānasā bālakhilyāstathā cānye maharṣayaḥ || [13]
brahmajñānasya nidhaya da(ya)masya niyamasya ca |

tapasastejasā dīptā hūyamānā ivāgnayaḥ || [14]
sukhopaviṣṭāste tatra puṇyāṃ cakruḥ kathāmimām |

サーンクリティヤ、バイジャヴァーピ、クシカ、バーダラーヤナ、バディシャ、ジャラローマン、カーピヤとカーティヤーヤナ、カーンカーヤナ、カйкаシェーヤ、ダウミヤ、マーリーチャ、カーシュヤパ、シャルカラークシャ、ヒラニヤークシャ、ローカークシャ、パインギも、シャウナカ、シャークネーヤ、マイトレーヤ、マイマターヤニ、彼らに加えヴィカーナス派とヴァーラキリヤ派の聖仙たちや、その他の偉大な聖仙たちもいた。彼らはすべて神聖な知識や自制(禁戒)や心の抑制(勸戒)を備えており、燃えさかる火のように苦行の輝きに満ちていた。彼らは安らかに坐し、気高い討議を行った。[11-14]

討 論

dharmārthakāmamokṣāṇāṃ ārogyaṃ mūlaṃ uttamam || [15]
rogāstasyāpahartāraḥ śreyaso jīvitasya ca |
prādurbhūto manuṣyāṇāmantarāyo mahānayaṃ || [16]
kaḥ syatteṣāṃ śamopāya ityuktvā dhyānmāsthitaḥ |
atha te śaraṇaṃ śakraṃ dadṛṣurdhyānacakṣuṣā || [17]
sa vakṣyati śamopāyaṃ yathāvadamarabrahūḥ |

健康は法<徳>[ダルマ]、実利<目的>[アルタ]、願望<快樂>[カーマ]、解脱[モークシャ]を実現するための最良の基盤であるが、病気はこの基盤や幸福、そして人生そのものを破壊してしまう。昨今、病気が生じ人類にとって最大の障害となっているが、病気の改善にはどんな方法があるだろうか。そう言って、彼らは修行に入り瞑想した。そして、瞑想によりインドラ神が救いの神だと悟った。かの神々の中の神、不死身のインドラ神こそが、唯一さまざまな病気の正しい克服法を伝えてくれるだろうと悟った。[15-17]

kaḥ sahasrākṣabhavanaṃ gacchet praṣṭuṃ śacīpatim || [18]
ahamarthe niyujyeyamatreti prathamam vacaḥ |
bharadvājo'bravīttasmādrṣibhiḥ sa niyojitaḥ || [19]

千の目をもつインドラ神の館へ行き、インドラ神[シャチーパティ]から学ぶ勇気のある者はだれか。この問い掛けに、「私にその役目を任せてください」と最初に口を開いたのがバラドヴァージヤだったので、聖仙たちは彼を任命した。[18-19]

バラドヴァージャ、インドラ神の面前で教えを請う

sa śakrabhavanam gatvā surarṣiṅgamadhyagam |
 dadarśa balahantāraṃ dīpyamānamivānaḥ || [20]
 so'bhigamya jayāśīrbhirabhinandya sureśvaram |
 provāca vinayāddhīmānṛsīṅgāṃ vākyaṃuttamam || [21]
 vyādhayo hi samutpannāḥ sarvaprāṇibhayaṅkarāḥ |
 tadbrūhi me śamopāyaṃ yathāvadamaraprabho || [22]

彼はインドラ神[シャクラ]の館に赴き、悪魔バラの征伐者であるインドラ神が神々しい聖仙たちの中心に座り、炎の如く光り輝いているのを見た。賢明なバラドヴァージャはインドラ神の真正面に立ち、賞賛と勝利の祝辞を述べて恭しく礼拝し、聖仙たちの言葉をインドラ神に告げた。「不死身の神々の長よ、すべての生き物に恐怖心を起こさせるさまざまな病気が生じています。病気を改善する方法を私にお教えてください。」[20-22]

インドラ神、バラドヴァージャにアーユルヴェーダを伝授する

tasmai provāca bhagavānāyurvedaṃ śatakratuḥ |
 padairalpaimatiṃ buddhvā vipulāṃ paramarṣaye || [23]
 hetuliṅgauśadhajñānaṃ svasthāturaparāyaṇam |
 trisūtraṃ śāsvataṃ puṇyaṃ bubudhe yaṃ pitāmahaḥ || [24]

それで偉大なインドラ神[シャククラウトゥ]は、この聖仙が広大な知性と理解力を有する者だと見極め、彼に簡潔な言葉でアーユルヴェーダを伝授した。アーユルヴェーダは健康人にも病人にも最上の道であり、病因論と症候論と治療論の3教典<3原則>[トリ・スートラ]を備えた永遠不変の神聖な学問であり、ブラフマー神[ピター・マハ]（創造主）が最初に会得したものである。このアーユルヴェーダを、インドラ神はバラドヴァージャに伝授したのである。[23-24]

so'nantapāraṃ triskandhaṃ āyurvedaṃ mahāmatiḥ |
 yathāvadacirāt sarvaṃ bubudhe tanmanā munih || [25]
 tenāyuramitaṃ lebhe bharadvājaḥ sukhānvitam |
 ṛṣibhyo'nadhikaṃ tacca śāśamsānavaśeṣayan || [26]

偉大な理解力に恵まれた聖仙であるバラドヴァージャは一心不乱に集中し、3本柱<3原則>[トリ・スカンダ]からなる終わりが無いほど広大なアーユルヴェーダを、短期間で正確かつ完璧に会得した。このことによってバラドヴァージャは果てしなく幸福な生命を得た。

そして彼はアーユルヴェーダを、付け加えたり省略したりせず、そのまま聖仙たちに伝えた。[25-26]

アーユルヴェーダ、地上へ伝授される

ṛṣayaśca bharadvājajagṛhustaṃ prajāhitam |
 dīrghamāyuscikīrṣanto vedaṃ vardhanaṃ āyusaḥ || [27]
 maharṣayaste dadṛṣuryathāvajñānacakṣuṣā |
 sāmānyamca viśeṣaṃ ca guṇān dravyāṇi karma ca || [28]
 samavāyaṃ ca tajjñātvā tantroктаṃ vidhiṃ āsthitāḥ |
 lebhire pramaṃ śarma jīvitaṃ cāpyanitvaram || [29]

長寿を望む聖仙たちもまた、バラドヴァージャから有益で寿命を長くする神聖なヴェーダの知識を伝授された。すべての偉大な聖仙たちはさらに、サーマーニヤ(類似)、ヴィシェーシャ(相違)、グナ(属性)、ドラヴィヤ(物質)、カルマ(作用)、サマヴァーヤ(分離不可能な結合)に関する知識を正確に理解した。こうして、彼らはその教本の教義に忠実に従い、無上の幸福と不朽の寿命を実現した。[27-29]

アートルーヤ(プナルヴァス)の6人の弟子

atha maitrīparaḥ puṇyamāyurvedaṃ punarvasuḥ |
 śiṣyebhyo dattavān ṣaḍbhyaḥ sarvabhūtānukampayā || [30]
 agniveśaśca bhel(ḍ)aśca jatūkarṇaḥ parāśaraḥ |
 hārītaḥ kṣārapāṇiśca jagṛhustanmunervacaḥ || [31]

さて、プナルヴァスは親切心から、すべての生命あるものにたいする思いやりをもって、神聖なアーユルヴェーダを6人の弟子に伝授した。つまりアグニヴェーシャ、ベーラ、ジャトウーカルナ、パラージャラ、ハーリータ、クシャーラパーニが、聖仙プナルヴァスから神聖な教えの言葉を授かった。[30-31]

アグニヴェーシャ、最初に教本を著わす

buddherviśeṣastatrāsīnnopadeśāntaraṃ munḥ |
 tantrasya kartā prathamamagniveśo yato'bhavat || [32]
 atha bhelādayaścakruḥ svaṃ svaṃ tantraṃ, kṛtāni ca |
 śrāvayāmāsuraṅtreyaṃ sarṣisaṅghaṃ sumedhasaḥ || [33]

アグニヴェーシャがアーユルヴェーダ教本を最初に著したのは、彼に非凡な才能があったからで、聖仙の教え方に差異があったからではない。その後、ベーラたちもそれぞれ自分の教本を著わした。知性に溢れた彼ら全員が、聖仙の集団の中に座っていたアートレーヤの前で自分の著作を発表した。[32-33]

6人の弟子の教本、大聖仙を喜ばせる

śrutvā sūtraṇamarthānāmṛṣayaḥ puṇyakarmaṇām |
yathāvatsūtritramiti prahr̥ṣṭāste’numenire || [34]
sarva evāstuvanstānśca sarvabhūtahitaiṣiṇaḥ |
sādhu bhūteṣvanukrośa ityuccairabruvan samam || [35]
taṃ puṇyam śuṣruvuḥ śabdaṃ divi devar̥ṣayaḥ sthitāḥ |
sāmarāḥ paramar̥ṣiṇām śrutvā mumudire param || [36]
aho sādhviti nirghoṣo lokānstrīnanvavādayat |
nabhasi snigdhaḡambhīro har̥ṣādbhūtairudīritaḥ || [37]

聖仙たちはそれぞれの著作の内容が慈悲に満ちているのを聞いて非常に満足し、すべて正確に編纂されていると高く評価した。聖仙たち全員がすべての生命あるものの愛護者である6人の弟子を褒めたたえ、「生命あるものに大きな恩恵をもたらした」と大声で言い放った。偉大な聖仙たちから発せられたこの声高で気高い言葉は、天界に住む聖仙たちや神々の耳にも届き、彼らは非常に喜んだ。喜びとともに空に発せられた「素晴らしい」という深く慈愛のこもった声が、三世界(天・地・空) [トリ・ローカ]に鳴り響いた。[34-37]

śivo vāyurvavau sarvā bhābhirunmilitā diśaḥ |
nipetuḥ sajalāścaiva divyāḥ kusumavṛṣṭayaḥ || [38]
athāgniveśapramukhān viviṣurjñānadevatāḥ |
buddhiḥ siddhiḥ smṛtirmedhā dhṛtiḥ kīrtiḥ kṣamā dayā || [39]
tāni cānumatānyeṣāṃ tantrāṇi paramar̥ṣibhiḥ |
bha(bhā)vāya bhūtasāṅghānām pratiṣṭhām bhuvi lebhire || [40]

心地よい風が吹きはじめ、すべての方角が光で満たされ、聖なる花吹雪と雨が降ってきた。そして、知識[ジュニャーナ]、理性[ブッディ]、成功[シッディ]、記憶力[スメリティ]、記銘力[メーダー]、決意[ドリティ]、名声[キールティ]、忍耐[クシャマ]、慈悲[ダヤ]の女神がアグニヴェーシャたちの身体の中へ入っていった。このようにして、偉大な聖仙たちに承認された彼らの教本は、生命あるものの繁栄のため、全世界の強力な基礎として確立されたのである。[38-40]

生命とアーユルヴェーダについて

アーユルヴェーダの定義

hitāhitam sukhaṃ dukkhamāyustasya hitāhitam |
mānaṃ ca tacca yatroktamāyurvedaḥ sa ucyate || [41]

アーユルヴェーダは、有益な人生、有害な人生、幸福な人生、不幸な人生、寿命をより良くするものと悪化させるもの、寿命の長さ、そして生命の本質を取り扱う。[41]

生命[アーユス]の定義と別名

śarīrendriyasattvātmasaṃyogo dhāri jīvitam |
nityagaścānubandhaśca paryāyairāyurucyate || [42]

「アーユス」とは、身体[シャリーラ]、感覚器官<感覚機能>[インドリヤ]、精神[サットヴァ]、我[アートマン]が結合したものを指す。また、「アーユス」には「ダーリ(支えるもの)」、「ジーヴィタ(生命あるもの)」、「ニティヤガ(流転するもの)」、「アヌバンダ(つなぐもの)^{注1}」という別名がある。[42]

注1 現世と来世を“つなぐもの”。

アーユルヴェーダは神聖な学問

tasyāyusaḥ puṇyatamo vedo vedavidāṃ mataḥ |
vakṣyate yanmanuṣyāṇām lokayorubhayorhitam || [43]

ヴェーダ^{注1}学者たちは、このアーユス(生命)のヴェーダ(科学<知識>)であるアーユルヴェーダを最も神聖なものとみなしている。アーユルヴェーダは人間にとって二世界(天・地)で有益であるといわれている。[43]

注1 古代インドのパラモン教の聖典の総称である。元来は知識一般を指す用語。

世界を構成する6つの原理

類似の原則[サーマーニャ]と相違の原則[ヴィシェーシャ]

|| sarvadā sarvabhāvānām sāmānyam vṛddhikāraṇam |
 || hrāsaheturviśeṣaśca, pravṛttirubhayasya tu || [44]
 || sāmānyamekatvakaraṇam, viśeṣastu pṛthaktvaktṛ |
 || tulyārthatā hi sāmānyam, viśeṣastu viparyayaḥ || [45]

物質の類似[サーマーニャ]は常に増大を引き起こし、相違[ヴィシェーシャ]は減少を引き起こす。増加と減少は、それぞれ類似しているものどうし、相違しているものどうしを付加することにより生じる。類似が同一化をもたらすのにたいして、相違は多様化をもたらす。言い換えると、類似は類似の効果(作用)を促すのにたいして、相違は相違の効果(作用)を促す。[44-45]

アーユルヴェーダの主題

|| sattvamātmā śarīraṃ ca trayametatrīdaṇḍavat |
 || lokastiṭhati samyogāttatra sarvaṃ pratiṣṭhitam || [46]
 || sa pumāmścetanam tacca taccādhikaraṇam smṛtam |
 || vedasyāsya, tadarthaṃ hi vedo'yaṃ samprakāśitaḥ || [47]

精神[サットヴァ]・我[アートマン]・身体[シャリーラ] — この三本柱が一体となって生命界を支えている。この三位一体の生命体がプルシャ [プーマンス] (人間)であり、意識を有するものであり、アーユルヴェーダの主題である。アーユルヴェーダは、人間のためだけに明るみに出されたのである。[46-47]

9種の物質(世界の成因)：生物と無生物

|| khādīnyātmā manaḥ kālo diśaśca dravyasaṃgrahaḥ |
 || sendriyaṃ cetanaṃ dravyaṃ, nirindriyamacetanam || [48]

アーカーシャ(空元素)、ヴァーユ(風元素)、テージャス(火元素)、アプ(水元素)、プリティヴィー(地元素)、我[アートマン]、精神(思考機能)[マナス]、時間[カーラ]、方角[ディシャ]が物質の総体[ドラヴィヤ・サングラハ] (宇宙の成因)である。感覚器官(感覚機能)[インドリヤ]をもつ物質[ドラヴィヤ]が生物[チェータナ]であり、感覚器官(感覚機能)をもたない物質が無生物[ア

チェータナ]である。[48]

属性[グナ]と作用[カルマ]

|| sārthā gurvādayo buddhiḥ prayatnāntāḥ parādayaḥ |
 || guṇāḥ proktāḥ prayatnādi karma ceṣṭitamucyate || [49]

感覚器官(感覚機能)の対象(シャブダ(音)、スパルシャ(触)、ルーパー(色)、ラサ(味)、ガンダ(香))、グル(重性)ではじまる性質^(A)[グル・アーダヤ]、知性[ブッディ]、プラヤトナ(努力)で終わる性質^(B)[プラヤトナ・アンター]、パラ(優性)ではじまる性質^(C)[パラ・アーダヤ]を、グナ(属性)と呼ぶ。力が加わることにより起こる動作をカルマ(作用)と呼ぶ。[49]

- (A) 重性 — 軽性[グルーラグ]、冷性 — 温性[シーターウシュナ]、油性 — 乾性[スニグダルークシャ]、緩慢性 — 鋭性[マンダティークシャナ]、停滞性 — 移動性[スティラサラ]、柔性 — 硬性[ムリドゥーカティナ]、清澄性 — 粘液性[ヴィシャダビッチラ]、滑性 — 粗性[シュラクシュナーカラ]、微細性 — 粗大性[スークシュマーストゥーラ]、固形性 — 流動性[サンドラードラヴァ]。(20の属性) .
- (B) 欲求[イッチャー]、嫌悪[ドヴェーシャ]、快感[スカ]、不快感[ドッカ]、意思的努力[プラヤトナ] (5つの属性) .
- (C) 優性[パラ]、劣性[アパラ]、適用[ユクティー]、数[サンキヤー]、結合[サンヨーガ]、分離[ヴィパーガ]、個別性[プリタクトヴァ]、測量[パリマーナ]、加工[サンスカーラ]、反復[アビヤーサ] (10の属性、パラデー・グナ)

備考 第26章29-35節参照。

分離不可能な結合[サマヴァーヤ]の定義

|| samavāyo'pṛthagbhāvo bhūmyādīnām guṇairmataḥ |
 || sa nityo yatra hi dravyaṃ na tatrāniyato guṇaḥ || [50]

プリティヴィー(地元素)などの物質は、それぞれのグナ(属性)と分離して存在し得ない。これを、サマヴァーヤ(分離不可能な結合)という。これは永遠の真実である。なぜなら、属性のない物質はあり得ないからである。[50]

物質[ドラヴィヤ]の定義

|| yatrāsritāḥ karmaguṇāḥ kāraṇaṃ samavāyi yat |
 || taddravyaṃ

そこに作用と属性が依拠して、それが分離不可能な結合[サマヴァーヤ]の原因[カーラナ]になっているものがドラヴィヤ(薬物を含む物質)である。

属性[グナ]の定義

|| samavāyī tu niśceṣṭaḥ kāraṇaṃ guṇaḥ || [51]

グナ(属性)は物質に分離不可能な状態で結合して作用を欠いている。分離不可能な結合が作用を欠いていることの原因である。[51]

作用[カルマ]の定義

|| saṃyoge ca vibhāge ca kāraṇaṃ dravyamāśritam |
|| kartavyasya kriyā karma karma nānyadapekṣyate || [52]
|| ityuktaṃ kāraṇaṃ

結合[サンヨーガ]と分離[ヴィバーガ]の原因であり、物質に依拠し、成されるべきことを遂行するのがカルマ(作用)である。カルマ(作用)はそれ以外の何ものも必要としない。

以上、原因<世界を構成する6つの範疇>[カーラナ]について述べた。[52]

病気と健康

アーユルヴェーダの目的

|| kāryaṃ dhātusāmyaṃ ihocyate |
|| dhātusāmyakriyā cuktā tantrasyāsya prayojanam || [53]

さて、つぎに結果[カーリヤ]であるダートゥ・サーミヤ(生命を維持し養う要素[ダートゥ]の平衡状態[サーミヤ])について検討しよう。なぜなら、この教本の目的はダートゥ・サーミヤの達成だからである。[53]

病気の3種の原因

|| kālabudhīndriyārthānāṃ yogo mithyā na cāti ca |
|| dvayāśrayāṇāṃ vyādhīnāṃ trividho hetusaṃgrahaḥ || [54]

精神と身体の2種の病気の原因は、時[カーラ]、理性[ブッディ]、感覚対象[インドリヤ・アルタ]の3種との、それぞれ過誤、過小、過度の3種の接触の仕方をするこことである。[54]

病気発生²の場と健康の原因

|| śarīraṃ sattvasaṃjñāṃ ca vyādhīnāmāśrayo mataḥ |
|| tathā sukhānāṃ yogastu sukhānāṃ kāraṇaṃ samaḥ || [55]

身体と精神の両者は、健康<快適な状態>[スカ]と同様に病気を生じる場でもあると考えられている。身体と精神が互いに調和よく作用しあうことが、健康の基盤[カーラナ]である。[55]

我[アートマン]の定義

|| nirvikāraḥ parastvātmā sattvabhūtaguṇendriyaiḥ |
|| caitanye kāraṇaṃ nityo draṣṭā paśyati hi kriyāḥ || [56]

最高我[パラ・アートマン]は、不変であり、超微細であり、精神[サットヴァ]と元素[プータ]の属性と感覚器官<感覚機能>[インドリヤ]とを連結して生命を起こさせる源である。最高我は永遠であり、すべての行為を見ている。

(A) プータ[元素]は5つある。プリティヴィー [地]、アプ[水]、テージャス[火]、ヴァーユ[風]とアーカーシャ [空]。その属性はそれぞれガンダ[香]、ラサ[味]、ルーパー[色]、スパルシャ [触]、シャブダ[音]である。[56]

身体的ドーシャと精神的ドーシャ

3種の身体的ドーシャと2種の精神的ドーシャ

|| vāyuḥ pittaṃ kaphaścoktaḥ śārīro doṣasaṃgrahaḥ |
|| mānasaḥ punaruddiṣṭo rajaśca tama eva ca || [57]

手短かに言うと、ヴァータ^{注1}とピッタとカパは身体的ドーシャであり、ラジャスとタマスは精神的ドーシャである。[57]

(A) ドーシャとは生理学的機能を起こす要因であるが、病気を引き起こすものとしても知られている。

注1 原文、英文ともに vāyu であるが、便宜上、身体的ドーシャを指す場合は「ヴァータ」、五大元素のひとつを指す場合は、「ヴァーユ」とする。ヴァータ、ヴァーユともに「風」を意味する。他に「アニラ」、「マールタ」「パヴァナ」などの同義語がある。

ドーシャの鎮静法

prāśāmyatyauśadhaiḥ pūrvo daivayuktivyapāśrayaiḥ ।
mānaso jñānavijñānadhairyasmṛtisamādhībhīḥ ॥ [58]

前述の身体的ドーシャは、信仰療法および合理的療法によって鎮静されるが、精神的ドーシャは真理、専門的知識、堅忍、神を想起すること[スムリティ]、瞑想[サマーディ]によって治療される。[58]

ヴァータ、ピッタ、カパの属性と鎮静法

rūkṣaḥ śīto laghuḥ sūkṣmaścalo' tha viśadaḥ kharāḥ ।
viparītaguṇairdravyairmārutaḥ sampraśāmyati ॥ [59]
sasnehamuṣṇaṁ tikṣṇaṁ ca dravaṁ amlaṁ saraṁ kaṭu ।
viparītaguṇaiḥ pittaṁ dravyairāśu praśāmyati ॥ [60]
guruśītamṛdusnigdhamadhurasthirapicchilāḥ ।
śleṣmaṇaḥ praśamaṁ yānti viparītaguṇairguṇāḥ ॥ [61]

ヴァータは乾性、冷性、軽性、微細性、移動性、清澄性、粗性という属性をもつので、逆の属性をもつ薬物によって即座に鎮静される。
ピッタの属性は軽度の油性、温性、鋭性、流動性、酸味、移動性、辛味なので、逆の属性をもつ薬物や物質によって即座に鎮静される。
カパの属性は重性、冷性、柔性、油性、甘味、停滞性、粘性なので、逆の属性をもつ薬物や物質によって鎮静される。[59-61]

治療可能な病気と不治の病の対処法

viparītaguṇairdeśamātrākalopapādītaiḥ ।
bheṣajairvinivartante vikārāḥ sādhyasammatāḥ ॥ [62]
sādhanaṁ na tvasādhyānāṁ vyādhīnāmupadekṣyate ।
bhūyaścāto yathādravyaṁ guṇakarmāṇivakṣyate ॥ [63]

治療可能な病気は、反対の属性をもつ薬物を場所と服用量と時間を慎重に考慮して処方す

ることにより回復できる。不治の病の処置については本章では言及しない。
ついで、薬物の属性[グナ]と作用[カルマ]について詳細に説明しよう。[62-63]

味^[ラサ]の定義と組成

味^[ラサ]の定義と五大元素^[マハーブータ]

rasanārtho rasastasya dravyamāpaḥ kṣīstathā ।
nirvṛtau ca viśeṣe ca pratyayāḥ khādayastrayaḥ ॥ [64]

ラサ(味)はラサナー(味覚の感覚器官である舌)の対象である。味の原因物質はアプ(水元素)とプリティヴィー(地元素)である。アーカーシャ(空元素)、ヴァーユ(風元素)、テージャス(火元素)の3種は、甘味などの味を出現させ識別するための要素である。[64]

味^[ラサ]の種類

svāduramlo' tha lavaṇaḥ kaṭukastikta eva ca ।
kaṣāyaśceti ṣaṭko'yaṁ rasānaṁ saṁgrahaḥ smṛtaḥ ॥ [65]

甘味、酸味、塩味、辛味、苦味、渋味が味の6個1組^[シャトカ](六味)である。[65]

ドーシャを増減させる味

svādvamlalavaṇā vāyumu, kaṣāyasvādutiktakāḥ ।
jayanti pittam, śleṣmāṇaṁ kaṣāyakaṭutiktakāḥ ॥ [66]
(kaṭvamlalavaṇāḥ pittaṁ, svādvamlalavaṇāḥ kapham ।
kaṭutiktakaṣāyāśca kopayanti samīraṇam [1])

六味のうち甘味・酸味・塩味はヴァータを鎮静し、渋味・甘味・苦味はピッタを鎮静し、渋味・辛味・苦味はカパを鎮静する。[66]
(辛味・酸味・塩味はピッタを増悪させ、甘味・酸味・塩味はカパを増悪させ、辛味・苦味、渋味はヴァータを増悪させる。[1])

物質の分類

効能による薬物の分類

|| kiñciddoṣaprasāmanam kiñciddhātupradūṣaṇam |
|| svasthavṛttau matam kiñcittrividham dravyamucyate || [67]

薬物[ドラヴィヤ]は3種類に分類できる。(1)ドーシャを鎮静させるもの、(2)ダートゥ（身体構成要素）に悪影響を与えるもの、(3)健康を維持するために摂取するもの、である。[67]

起源による薬物の分類

|| tat punastrividham proktam jāngamaubhidapārthivam |

薬物[ドラヴィヤ]は起源別に3種類に分類できる。(1)動物起源、(2)土壌起源、(3)植物起源。

動物起源の薬物

|| madhūni gorasāḥ pittam vasā majjā'srgāmiṣam || [68]
|| viṇmūtracarmareto'sthisnāyuśṛṅganakhāḥ khurāḥ |
|| jāṅgamebhyah prayujyante keśā lomāni rocanāḥ || [69]

蜂蜜、乳、乳製品、胆汁、筋肉脂肪(獣脂)[ヴァサー]、骨髓、血液、肉、便、尿、皮革、精液、骨、靭帯[スナーユ]、角、爪、ひづめ、産毛を含む体毛、牛などの胆汁の凝固物[ローチャー]が動物起源の薬物として用いられる。[68-69]

土壌起源の薬物

|| suvarṇam samalāḥ pañca lohāḥ sasikatāḥ sudhā |
|| maṅḥśilāle maṅayo lavaṇam gairikāñjane || [70]
|| bhaumamauṣadhamuddiṣṭam-

金[スヴァルナ]、鉱石類(鉄くず、瀝青)、5種類の金属^{注1}[パンチャ・ローハ]、砂[シカター]、石灰[スダー]、鶏冠石(四硫化ヒ素)[マナハシラー]、石黄(三硫化ヒ素)[アーラ]、宝石類[マニ]、塩[ラヴァナ]、紅土[ガイリカ]、輝安鉱(硫化アンチモン)[アンジャナ] — これが土壌より得られる薬物[ア

ウシャダ]である。[70]

注1 5種類の金属とは銀、銅、鉄、鉛、錫。

植物起源の薬物：植物の4分類と使用部分

|| -audbhidaṃ tu caturvidham |
|| vanaspatistathā vīrudvānaspatyastathauṣadhiḥ || [71]
|| phalairvanaspatiḥ puṣpairvānaspatyaḥ phalairapi |
|| oṣadhyah phalapākāntāḥ pratānairvīrudhaḥ smṛtāḥ || [72]
|| mūlatvaksāraniryāsanāl (ḍ) asvarasapallavāḥ |
|| kṣārāḥ kṣīram phalaṃ puṣpaṃ bhasma tailāni kaṇṭakāḥ || [73]
|| patrāṇi śuṅgāḥ kandāśca prarohāścaudbhido gaṇaḥ |

植物起源の薬物は4種類に分類される。(1)ヴァナスパティ（実の植物）、(2)ヴィールドゥ（つる性植物）、(3)ヴァーナスパティヤ(花と実の植物)、(4)オーシャディ（一年生植物）である。

(1)「実の植物」は実で知られる植物で、(3)「花と実の植物」は花と実で知られる植物で、(4)「一年生植物」は実り熟した後に枯れる植物で、(2)「つる性植物」はつるがのび広がる植物である。植物の使用部位は、根、樹皮、木髄、樹脂、茎、搾り汁、若葉、アルカリ(腐食性の灰汁)[クシャーラ]、乳液、果実、花、灰[バスマ]、油、とげ、葉、葉芽、根茎、新芽である。[71-73]

主な薬物

|| mūlinyah ṣoḍaśaikonaḥ phalinyo vimśatiḥ smṛtāḥ || [74]
|| mahāsnchāśca catvāraḥ pañcaiva lavaṇāni ca |
|| aṣṭau mūtrāṇi saṃ{ñ}khyātānyasṭāveva payāṃsi ca || [75]
|| śodhanārthāśca ṣaḍ vṛkṣāḥ punarvasunidarśitāḥ |
|| ya etān vetti saṃyoktuṃ vikāreṣu sa vedavit || [76]

有用な根を有する植物は16種類あり、有用な果実を有する植物は19種類、主要な油脂類[マハースネーハ]は4種類、塩は5種類、尿は8種類あり、乳も8種類あるが、さらにプナルヴァスは浄化療法に有効な樹木が6種類あることを付け加えた。病人にたいしてこれらを適切に処方する術を知っている者が、真にアーユルヴェーダを知る者である。[74-76]

16種の根が有用な薬用植物の名称と作用

hastidantī haimavatī śyāmā trivṛdadhoguḍā |
 saptalā śvetanāmā ca pratyakśreṇī gavākṣyapi || [77]
 jyotiṣmatī ca bimbī ca śaṅapuṣpī viṣāṇikā |
 ajagandhā dravantī ca kṣīriṇī cātra ṣoḍaśī || [78]
 śaṅapuṣpī ca bimbī ca chardane haimavatyapi |
 śvetā jyotiṣmatī caiva yojyā śīrṣavirecane || [79]
 ekādaśāvaśiṣṭā yāḥ prayojyāstā virecane |
 ityuktā nāmakarmabhyāṃ mūlinyāḥ,

16種の根が有用な薬用植物とは、ハスティダンティー [トウダイグサ科クロトン・オブロンギフォリウス]、ハイマヴァティー [アヤメ科ハナショウブ*]、シュヤーマー [ヒルガオ科フウセンアサガオの黒花種]、トリヴリト [フウセンアサガオ]、アドーグダー [トウダイグサ科ユーフォルビア・アカウリス*]、サプタラー [トウダイグサ科ユーフォルビア・ピロサ*]、シュヴェータナーマー [マメ科チョウマメの白花種]、ダンティー [pratyakśreṇī トウダイグサ科ヤトロパ・モンタナ]、ガヴァークシー [ウリ科コロシントウリ]、ジョーティシュマティー [ニシキギ科ヒマラヤツルウメモドキ]、ビンビー [ウリ科ヤサイカラスウリ]、シャナプシュピー [マメ科サンヘンブ]、ヴィシャーニカー*、アジャガンダー [シソ科セルピウムソウ(英名クリーピング・タイム)*]、ドラヴァンティー [トウダイグサ科ヤトロパ・グランドウリフェラ(英名フィジック・ナッツ)]そしてクシーリニー*である。この16種のうちシャナプシュピー、ビンビー、ハイマヴァティーは催吐法(嘔吐誘発)^[1]に、シュヴェターとジョーティシュマティーは経鼻頭部浄化法^[2]に有用である。残り11種は催下法(瀉下)^[3]に用いられる。以上、有用な根を有する薬用植物の名称と作用を述べた。[77-79]

注1 催吐薬を用いて吐かせる浄化治療法。5種の浄化療法[パンチャカルマ]のひとつ。「ヴァマナ」が一般的用語。

注2 鼻腔から薬剤を注入し、頭部の浄化を計る治療法。「シローヴィレーチャナ(シラス・ヴィレーチャナ)」が一般的用語。他に「ナスヤ」、「ナスタ」、「ナーヴァナ」の用語がある。

注3 瀉下薬(下剤)を用いて利通させる浄化治療法。この療法に用いる下剤を「催下剤」とよぶことにする。

備考 5種の浄化療法[パンチャカルマ]とはつぎの5つの療法を指す。

1. 経鼻頭部浄化法[シローヴィレーチャナまたはナスヤ]
2. 催吐法(嘔吐誘発)[ヴァマナ]
3. 催下法(瀉下)[ヴィレーチャナ]
4. 煎剤経腸法(浣腸)[アースターパナまたはニルーハ・バスティ]
5. 油剤経腸法(浣腸)[アヌヴァーサナ・バスティ]

19種の果実が有用な薬用植物の名称と作用

phalinīḥ śṛṇu || [80]
 śāṅkhinyatha viḍaṅgāni trpuṣaṃ madanāni ca |
 ḍhāmārgavamatheksvāku jīmūtaṃ kṛtavedhanam |
 ānūpaṃ sthalajaṃ caiva klītaṃ dvididhaṃ smṛtam || [81]
 prakīryā codakīryā ca pratyakpuṣpā tathā'bhayā |
 antaḥkoṭarapuṣpī ca hastiparṇyāśca śāradam || [82]
 kampillakāragvadhayoḥ phalaṃ yat kuṭajasya ca |
 dhāmārgavamatheksvāku jīmūtaṃ kṛtavedhanam || [83]
 madanaṃ kuṭajaṃ caiva trapuṣaṃ hastiparṇini |
 etāni vamaṇe caiva yojyānyāsthāpaneṣu ca || [84]
 nastāḥ pracchardane caiva pratyakpuṣpī vidhīyate |
 daśa yānyavaśiṣṭāni tānyuktāni virecane || [85]
 nāmakarmabhiruktāni phalānyekonavimsatiḥ |

つぎに果実が有用な薬用植物を挙げるので聞きなさい。シャンキニー [ウリ科クテノレプシス・ケラシフォルミス*]、ヴィダंगा [ヤブコウジ科エンベリア]、トラプシャ [ウリ科キュウリ]、マダナ [アカネ科ハリザクロ]、ダーマールガヴァ [ウリ科ヘチマ]、イクシュヴァーク [ユウガオ]、ジームータ [ウリ科ルファ・エチナタ(ヘチマの1種)、クリタヴェーダナ [ウリ科トカドヘチマ]、水生と陸生の2種類のクリータカ [スペインカンゾウ*]、プラキールヤー*、ウダキールヤー [マメ科クロヨナ*]、アパーマールガ [pratyakpuṣpā ヒユ科アラデイノコズチ]、ハリータキー [abhayā シクンシ科ミロバランノキ]、アンタハコータラプシュピー [ヒルガオ科オオバアサガオ属の1種*]、ハスティパルニー [ウリ科キュウリの変種*]、カンピッラカ [トウダイグサ科クスノハカシワ]の果実、アーラグヴァダ [マメ科ナンバンサイカチ]、クタジャ [キョウチクトウ科セイロンライティア(英名コネッシ)]。

この19種のうちダーマールガヴァ、イクシュヴァーク、ジームータ、クリタヴェーダナ、マダナ、クタジャ、トラプシャ、ハスティパルニーの8種は催吐法(嘔吐誘発)^[1]に用いられる。アパーマールガは経鼻頭部浄化法^[2]に用いられる。残りの10種は催下法(瀉下)に用いられる。以上、19種の有用な果実を有する薬用植物の名称と作用を述べた。[80-85]

注1 アースターパナあるいはニルーハと呼ばれる浣腸で用いられる薬剤は、煎じ液に油剤を加えたものである。なお、パンチャカルマにおける浣腸療法を、一般的な浣腸と区別して「経腸法」とした。

4種の主要な油脂の名称と作用

sarpistailaṃ vasā majjā sneho diṣṭaścaturvidhaḥ || [86]

pānābhyañjanabastyarthaṃ nasyārthaṃ caiva yogataḥ |
snehanā jīvanā varṇyā balopacayavardhanāḥ || [87]
snehā hyete ca vihitā vātapittakaphāpahāḥ |

主要な油脂類[マハースネーハ]は、ギー^{注1}（バターオイル）[サルピス]、油[タイラ]、獣脂[ヴァサー]、骨髄脂肪(髄脂)[マッジャー^{注2}]の4種であり、それぞれ服用、オイルマッサージ[アビヤンジャナ^{注3}]、経腸法(浣腸)剤[バスティ]、経鼻法(点鼻)[ナスヤ]として用いられる。これらの油脂類は、油性、活力、色つや、体力、発育を増進させ、さらに増大したヴァータ、ピッタ、カパを抑制する。[86-87]

注1 「インドで常用されている精製バター。英語のバターオイルにあたる。……その製法はヒツジ、ヤギ、ウシ、スイギュウ、ヤクなどの発酵乳の粗製バターをとろ火で溶解し、水分と微量のタンパク質を除去して、透明なバターオイルの部分やすく取る。……中国唐代の乳製品の「醍醐(だいご)」が、それにあたることもほぼ定説化しつつある」(『Super Niponica 2001』小学館)。なお、インドでは、単に「ギー」というときは、牛のギーを指す。また、発酵乳(ダヒ)からギーを分離した後の残りの液体をバターミルク(ラッシー)という。サルピスの異名はグリタ。

注2 マッジャーは骨髄のこと。油剤の1種として扱われるときは、骨髄内の脂肪成分を指すと思われるので、略して「髄脂」とする。

注3 アビヤンガと同義。身体に油剤を塗擦すること。

5種の塩の名称と作用

sauvarcalaṃ saindhavaṃ ca viḍamaudbhidameva ca || [88]
sāmdreṇa sahaitāni pañca syurlavaṇāni ca |
snigdhanūyūṣṇāni tīkṣṇāni dīpanīyatamāni ca || [89]
ālepanārthe yujyante snehasvedavidhau tathā |
adhobhāgordvabhāgeṣu nirūheṣvanuvāsane || [90]
abhyañjane bhojanārthe śirasaśca virecane |
śastrakarmaṇi vartyarthamañjanotsādaneṣu ca || [91]
ajirṇānāhayorvāte gulme śūle tathodare |
uktāni lavaṇāni—

スヴァールチャラ*などの植物から採取したサウヴァールチャラー塩、サインダヴァ塩(岩塩)、尿から採取したヴィダ塩、土から採取したアウドビダ塩そして海水から採取したサームドラ塩が5種類の塩である。5種の塩は油性、温性、鋭性を有し、アグニ(消化機能)にたいする最良の増進剤となり、泥膏貼付[アーレーパナ]、油剤法[スネーハナ]、発汗法[スヴェーダナ]、催下法(瀉下)、催吐法(嘔吐誘発)、煎剤経腸法(浣腸)[ニルーハ]および油剤経腸

法(浣腸)[アヌヴァーサナ]、オイルマッサージ[アビヤンガ]、食事、頭部浄化法[シロー・ヴィレーチャナ]、外科的処置、坐薬、眼軟膏[アンジャナ]、香油按摩[ウトサーダナ]として、不消化(消化力減退)[アジールナ]やアーナーハ(鼓腸(便秘))、ヴァータ性疾患、グルマ(腹部腫瘍)、シューラ(疝痛)、ウダラ(腹部疾患)のときに用いられる。以上、塩について述べた。[88-91]

注1 アジールナは、主として、食べたものの消化が完了していない状態や消化力減退を指す。「不消化」(梵和)

8種の尿の名称と作用

ūrdhvaṃ mūtrānyaṣṭau nibodha me || [92]
mukhyāni yāni diṣṭāni sarvānyātreyaśāsane |
avimūtamajāmūtraṃ gomūtraṃ māhiṣaṃ ca yat {tathā} || [93]
hastimūtramathoṣṭrasya hayasya ca kharasya ca |
uṣṇaṃ tīkṣṇamatho'rūkṣaṃ kaṭukaṃ lavaṇānvitam || [94]
mūtramutsādane yuktaṃ yuktamālepaneṣu ca |
yuktamāsthāpane mūtraṃ yuktaṃ cāpi virecane || [95]
svedeṣvapi ca tadyuktamānāheṣvagadeṣu ca |
udareṣvatha cārśaḥsu gulmikuṣṭhikilāṣiṣu || [96]
tadyuktamupanāheṣu pariṣeke tathaiva ca |

つぎに、アートレーヤの教本の中で重要なものとして明記されている8種の尿を挙げるので聞きなさい。牝羊尿、牝山羊尿、牝牛尿、牝水牛尿、牝象尿、牝ラクダ尿、牝馬尿、牝ロバ尿。一般的に尿は温性、鋭性、軽度の乾性で、辛性、塩性という属性を有する。そして香油按摩[ウトサーダナ]、泥膏貼付[アーレーパナ]、煎剤経腸法(浣腸)[アースターパナ]、催下法(瀉下)[ヴィレーチャナ]、発汗法[スヴェーダナ]に用いられ、アーナーハ(鼓腸(便秘))、中毒[アガダ]、ウダラ(腹部疾患)、アルシャ(痔核)、グルマ(腹部腫瘍)、クシュタ(皮膚病)、キラサ(らい性皮膚疹)に有効であり、また泥膏貼付[ウパナーハ]や灌注法^{注1}[パリシェーカ]として使用される。[92-96]

注1 灌注=患者の身体に薬液などを注ぐこと。(医学英和大辞典)

dīpanīyaṃ viṣaghaṇaṃ ca krimighnaṃ copadiśyate || [97]
pāṇḍurogopasṛṣṭānāmuttamaṃ śarma cocyate |
śleṣmāṇaṃ śamayet pītaṃ mārutaṃ cānulomayet || [98]
karṣet pittamadhobhāgamityasmin guṇasaṃgrahaḥ |
sāmānyena mayoktastu pṛthaktvena pravakṣyate || [99]

さらに食欲や消化力を増進させ、毒を排斥し、駆虫薬ともなり、パーンドウ・ローガ(貧

血)で苦しむ者にとって最上の効果がある。尿はカバを鎮静し、ヴァータを駆風し、ピッタを催下(瀉下)剤とともに肛門から排泄させる。これが尿の性質に関する私の総論である。つぎは、個別に述べることにしよう。[97-99]

avimūtram satiktaṃ syāt snigdhaṃ pittāvirodhi ca |
ājaṃ kaṣāyamadhuraṃ pathyaṃ doṣānnihanti ca || [100]
gavyaṃ samadhuraṃ kiñciddoṣaghaṇaṃ krimikuṣṭhanut |
kaṇḍūm ca śamayet pitaṃ samyagdoṣodare hitam || [101]

牝羊の尿は軽度の苦味で、油性で、ピッタと拮抗しない。牝山羊の尿は渋味と甘味があり、身体経路にたいして有益であり、すべてのドーシャを抑制する。牝牛の尿はわずかに甘味があり、ドーシャを鎮静し、クリミ(寄生虫病)とクシュタ(皮膚病)を破壊し、かゆみを取りのぞく。飲用するとトリドーシャ(3つのドーシャ)によるウダラ(腹部疾患)に有効である。[100-101]

arśaśophodaraghaṇaṃ tu sakṣāraṃ māhiṣaṃ saram |
hāstikaṃ lavaṇaṃ mūtraṃ hitaṃ tu krimikuṣṭhinām || [102]
praśastaṃ baddhaviṇmūtraviṣaśleṣmāmayārśasām |
satiktaṃ śvāsakāsaghaṇamarśoghaṇaṃ cauṣtramucyate || [103]
vājināṃ tiktakaṭukaṃ kuṣṭhavraṇaviṣāpaham |
kharamūtramapasmāronmādagrahavināśanam || [104]
itihoktāni mūtrāṇi yathāsāmarthyayogataḥ |

牝水牛の尿は弱アルカリ性で、緩下性があり、痔[アルシャ]とショーパー(浮腫)とウダラ(腹部疾患)を抑制する。牝象の尿は塩味で、クリミ(寄生虫病)とクシュタ(皮膚病)の患者に有効である。また尿と便の停滞、毒、カバ性疾患、痔に勧められる。牝ラクダの尿は軽度の苦味で、呼吸困難や咳、痔を抑える。牝馬の尿は苦味と辛味があり、クシュタ(皮膚病)と創傷、毒を抑制する。牝ロバの尿はてんかん[アパスマーラ]、狂気(精神異常)[ウンマーダ]、グラハ(憑依による発作)を抑制する。以上、尿の効能と用途を述べた。[102-104]

8種の乳の名称と作用

ataḥ kṣīrāṇi vakṣyante karma caiśāṃ guṇāśca ye || [105]
avikṣīramajākṣīraṃ gokṣīraṃ māhiṣaṃ ca yat |
uṣṭrīnāmatha nāgīnām vaḍavāyāḥ striyāstathā || [106]
prāyaśo madhuraṃ snigdhaṃ śītaṃ stanyaṃ payomatam |
prīṇanaṃ bṛmhaṇaṃ vṛṣyaṃ medhyaṃ balyaṃ manaskaram || [107]

jīvaniyaṃ śaharaṃ śvāsakāsanibarhaṇam |
hanti śoṇitapittaṃ ca sandhānaṃ vihatasya ca || [108]
sarvaprāṇabhṛtām sātmyaṃ śamanaṃ śodhanaṃ tathā |
tṛṣṇāghnaṃ dīpanīyaṃ ca śreṣṭhaṃ kṣīṇakṣateṣu ca || [109]

つぎに8種の乳とそれらの属性と作用についても述べよう。羊、山羊、牛、水牛、ラクダ、象、馬の乳それに母乳である。一般に乳は甘味があり、油性、冷性、催乳作用があり、元気づけ、身体を頑丈にし、精子を形成し、知性や体力や心を増進させ、活力を与え、疲労を取り、呼吸困難や咳やラクタピッタ(出血)を制し、傷を癒し、全生物にとって健康に良く、ドーシャの鎮静剤となり、マラ(老廃物)を排除し、渴きを癒し、食欲増進剤となる。乳は、クシーナ(衰弱)やクシャタ(損傷)〈肺結核[クシーナ・クシャタ]〉に非常に有益である。[105-109]

注1 身体各部からの出血を主症状とする疾患、内的出血。元のサンスクリットは、ここではショーナピッタ。ローヒタピッタ、アスリクピッタなどともいうが、ラクタピッタが一般的である。ラクタピッタは特有の疾患概念なのでサンスクリットのままにし、一応「出血」という訳を添えた。

pāṇḍuroge' mlapitte ca śoṣe gulme tathodare |
atīsāre jvare dāhe śvayathau ca viśeṣataḥ || [110]
yonisūkrapradoṣeṣu mūtreṣvapracureṣu ca |
puriṣe grathite pathyaṃ vātapittavikāriṇām || [111]
nasyālepāvagāheṣu vamanāsthāpaneṣu ca |
virecane snehane ca payaḥ sarvatra yujyate || [112]
yathākramaṃ ksīraguṇānekaikasya pṛthak pṛthak |
annapānādike' dhyāye bhūyo vakṣyāmyaśeṣataḥ || [113]

乳は、貧血[パンドゥローガ]、過酸症[アムラピッタ]、肺病〈消耗性疾患〉[ショージャ]、腹部腫瘍[グルマ]、腹部疾患[ウダラ]、下痢[アティーサーラ]、発熱[ジュヅアラ]、灼熱感[ダーハ]、浮腫[シュヴァヴァット]、とくに種々の女性器疾患に有用で、さらに精液、排尿減少、硬い便、ヴァータやピッタ性の疾患にも有効である。乳は経鼻頭部浄化法[ナスヤ]、泥膏貼付[アーレーバ]、入浴剤、催吐剤(嘔吐誘発)、煎剤経腸法(浣腸)[アースターパナ]、催下法(瀉下)[ヴィレーチャナ]、油剤法[スネーハナ]のすべてに用いられる。食物と飲料の章で、8種の乳の作用と使用方法を詳細に述べることにする。[110-113]

浄化療法に有効な樹木

乳液を使用する3種の樹木とその作用

||| athāpare trayo vṛkṣāḥ pṛthagye phalamūlibhiḥ |
 ||| snuhyarkāśmantakāsteṣāmidam karma pṛthak pṛthak || [114]
 ||| vāmane’śmantakam vidyāt snuhikṣiram virecane |
 ||| kṣīramarkasya vijñeyam vāmane savirecane || [115]

乳液を使用する3種の樹木がある。それは棘のあるスヌヒー〔トウダイグサ科キリンカク〕、アルカ〔ガガイモ科カロトロピス・ギガンテア(紫花種)〕、心臓形の葉のアシュマンタカ〔クワ科フィクス・ルンフィ*〕であり、パリニー（果実が有用な植物）やムーリニー（根が有用な植物）とは異なるものである。アシュマンタカは催吐剤として、スヌヒーの乳液は催下(瀉下)剤として、そしてアルカの乳液は催吐剤としても催下剤としても知られている。[114-115]

樹皮を使用する3種の樹木とその作用

||| imāmstrīnaparān vṛkṣānāhuryeṣām hitāstvacāḥ |
 ||| pūtikāḥ kṛṣṇagandhā ca tilvakaśca tathā taruḥ || [116]
 ||| virecane prayoktavyaḥ pūtikastilvakastathā |
 ||| kṛṣṇagandhā paṛisarpe śotheṣvarśahsu cocyate || [117]
 ||| dadruvidradhigaṇḍeṣu kuṣṭheṣvapyalajīṣu ca |
 ||| ṣaḍvṛkṣāñchodhanānetānapi vidyādvicakṣaṇaḥ || [118]

3種の樹皮が有用な樹木がある。プーティーカ〔マメ科リスノツメ*〕、クリシュナガンダー〔ワサビノキ科ワサビノキ〕、ティルヴァカ〔スイカズラ科ヴィブルナム・ネルヴォスム*〕であり、その樹皮が有用である。プーティーカとティルヴァカは催下剤として用いられ、クリシュナガンダーはパリーサルパ(丹毒)や浮腫〔ショータ〕、痔、白癬、膿瘍、甲状腺腫、皮膚病〔クシュタ〕、アラジーに用いられる。医者は今ここに挙げた6種の樹木のことも知っておくべきである。[116-118]

まとめ

||| ityuktā phalamūlinyaḥ snehāśca lavaṇāni ca |
 ||| mūtrm kṣīrāṇi vṛkṣāśca ṣaḍye diṣṭapayastvacāḥ || [119]

以上、果実と根を用いる薬用植物、油脂、塩、尿、乳、そして乳液と樹皮を用いる6種の樹木を述べた。[119]

薬物の知識と正しい使用の重要性

||| auśadhīrnāmarūpābhyām jānate hyajapā vane |
 ||| avipāścaiva gopāśca ye cānye vanavāsinaḥ || [120]
 ||| na nāmajñānamātreṇa rūpajñānena vā punaḥ |
 ||| ośadhīnām parām prāptim kaścidveditumarhati || [121]
 ||| yogavittvāpya {vinnāma} rūpajñāstāsām tattvaviducyate |
 ||| kiṃ punaryo vijānīyādośadhīḥ sarvathā bhiṣak || [122]
 ||| yogaṃ āsām tu yo vidyāddeśakālopapāditaḥ |
 ||| puruṣam puruṣam vikṣya sa jācyo bhiṣaguttamaḥ || [123]

山羊飼いや羊飼、牛飼、その他森に住む者は植物の名前や形状を知っている。しかし、植物の名前や形状を知っているだけでは、植物に関して完全に理解していることにはならない。たとえ植物の形状を知らなくても、その応用法を知っている者が真の識者であり、ましてやあらゆる局面から植物を知る者が真の識者であることはいままでもない。これらの植物類を場所と時に照らし、しかも個々人の体質を留意して処方する者が、最高の医者である。[120-123]

薬物の知識がないことによる害悪

||| yathā viṣam yathā śastraṃ yathā’gniraśaniryathā |
 ||| tathauśadhamavijñātaṃ vijñātamamṛtaṃ yathā || [124]
 ||| auśadham hyanabhijñātaṃ nāmarūpaḥaistribhiḥ |
 ||| vijñātaṃ cāpi duryuktamanarthāyopapadyate || [125]

薬は知識がなければ毒や凶器、火、稲妻のごときものになるが、知識があれば甘露のごときものになる。名前や形状、属性や作用が分からない薬や、よく分かっているにもかかわらず不適切に投与された薬は厄介な問題をもたらす。[124-125]

にせ医者を排斥せよ

||| yogādāpi viṣam tīkṣṇamuttamaṃ bheṣajam bhavet |
 ||| bheṣajam cāpi duryuktaṃ tīkṣṇam saṃpadyate viṣam || [126]
 ||| tasmāna bhiṣajā yuktaṃ yuktibāhyena bheṣajam |

dhīmatā kiṃ{ñ}cidādeyaṃ jīvitārogyakāṅkṣiṇā || [127]
 kuryānīpatito mūrdhni saśeṣaṃ vasavāsaniḥ |
 saśeṣamāturaṃ kuryānna tvajñamatamauśadham || [128]
 duhkhitāya śayānāya śraddadhānāya rogiṇe |
 yo bheṣajamavijñāya prājñamāni prayacchati || [129]
 tyaktadharmasya pāpasya mṛtyubhūtasya durmateḥ |
 naro narakapātī syāt tasya saṃbhāṣaṇādapi || [130]
 varamāśiviṣaviṣaṃ kvathitaṃ tāmrameva vā |
 pītamatyagnisantaptā bhakṣitāvā'pyayoguḍāḥ || [131]
 natu śrutavatāṃ veśaṃ bibhratā śaraṇāgatāt |
 gr̥hitamannaṃ pānaṃ vā vittaṃ vā rogapiḍitāt || [132]

激しい毒も適切な投与方法によって最良の薬となる。一方、最良の薬でさえも投与方法を誤ると激しい毒になってしまう。したがって、長寿や健康を切に願う賢明な者は、理に適った投与方法を知らない医者(にせ医者)から処方されたいかなる薬もけっして服用すべきではない。インドラ神の稲妻がたとえ頭に落ちたとしても助かるかもしれない。しかし、無知な医者から処方された薬はけっして患者の命を救いはしない。自分を賢人だと思いこみ、病に苦しみ寝たきりで医者を信頼し切っている患者に知らない薬を投与する医者。このように医者としての使命感がない、罪深い死の権化である邪悪な医者と話すだけでも、人は地獄に落ちる。学者の衣をまとっただけの者は、病に冒され医者を頼りにしている者に食事の接待や金銭を強要するよりも、蛇毒や溶けた銅や赤く熱された鉄の塊を飲み込むのがふさわしい。[126-132]

医者を志願する者がすべきこと

bhiṣagbubhūṣurmatimān ataḥ svagūṇasampadi |
 paraṃ prayatnamātiṣṭhet prāṇadaḥ syādyathā nṛṇām || [133]

医者になろうと望む賢明な者は、よい性質を身につけるために全力で努力しなければいけない。さもないと人類にたいして生命を与える者にはなれない。[133]

最良の薬物と最高の医者

tadeva yuktaṃ bhaiṣajyaṃ yadārogyāya kalpate |
 sa caiva bhiṣajām śreṣṭho rogebhyo yaḥ pramocayet || [134]
 samyakprayogaṃ sarveṣāṃ siddhirākhyāti karmaṇām |
 siddhirākhyāti sarvaiśca guṇairyuktaṃ bhiṣaktamam || [135]

健康をもたらし得る薬物こそが、まさに最良の薬物である。そして患者を病気から救うことのできる医者こそが、まさに最高の医者である。治療の成功は、すべての処置が適切に施されたことの証しである。同時に治療の成功は、医者が名医としてのすべての資質を備えているということを指し示すものでもある。[134-135]

第1章のまとめ

tatra ślokāḥ —
 āyurvedāgamo heturāgamasya pravartam |
 sūtraṇasyābhyanjñānamāyurvedasya nirṇayaḥ || [136]
 sampūrṇaṃ kāraṇaṃ kāryamāyurvedaprayojanam |
 hetavaścaiva doṣāśca bheṣajam saṃgrahaṇa ca || [137]
 rasāḥ sapratyayadravyāstrividho dravyasaṃgrahaḥ |
 mūlīnyāśca phalīnyāśca snehāśca lavaṇāni ca || [138]
 mūtraṃ kṣīrāṇi vṛkṣāśca ṣaḍye kṣīratvagāśrayāḥ |
 karmāṇi caiśāṃ sarveṣāṃ yogāyogaguṇāguṇaḥ || [139]
 vaidyāpavādo yatrasthāḥ sarve ca bhiṣajām guṇāḥ |
 sarvametat samākhyātam pūrvādhyāye maharṣiṇā || [140]

最後は、要約の詩節^{註1}[シュローカ]である。

アーユルヴェーダの成立、その理由と伝授の経緯、教本編纂の承認、アーユルヴェーダの定義、原因と作用の定義、アーユルヴェーダの目的、病因、ドーシャ、薬物のまとめ。味と味を生じさせる元素と識別させる元素、物質の3分類、根や果実を用いる植物類、油脂、塩、尿、乳、乳液と樹皮を用いる6種の樹木、それらの作用、適切な処方の長所と不適切な処方の短所、にせ医者とすべての資質が備わった名医。第1章では、これらすべてが偉大な聖仙によって述べられた。[136-140]

注1 詩節(偈)[シュローカ]という韻文で各章の内容をまとめている。

ityagniveśakṛte tantre carakapratīsamskṛte sūtrasthāne dīrghañjīvitīyo nāma prathamodhyāyaḥ ||
 (1)

以上で、アグニヴェーシャが著し、チャラカが改訂した本集・総論篇の第1章「長寿を…」を終わる。(1)